

安楽城あらかきの伝承(二)

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城あらかきの伝承（二）

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城の伝承(二) — 佐藤陸三さんの語り —

第一部 生 物

雀と燕 時鳥の兄弟 梟と烏の仲 行々子

鳶と烏 みそさざいと鷹 蟹こむがし

ねずみといたち 殺生の名人

おごさま(蚕)の始め

五

第二部 正月に因むむがし

地ン蔵ど団子 嘘五郎の正月仕度 笠地ン蔵

鬼婆ど正月肴 鰯の年越肴 産女の化物

三七

第三部

修身のむかし

六三

厩がら逃げた牛 馬のまぎめ 馬喰と山姥
猿と雉のよれえ田 猿ど蛙の餅泥棒 弘法泉の由来
小又の怪力童子 山屋の贗金造り 河童与吉の頓智

第四部

言葉にかかわる話

九九

作兵衛帖 大沢節の由来 大沢言葉 長頭廻し
なりもの禁止令 言葉の表と裏 えやづけえ
へんとか話 嘘つきくらえご 餅の小話

あとがき

一二九

安楽城の伝承(一) 目次

B 6 版 二〇七頁

第一部 昔 話

狐むがし ばばさの炉辺むがし
年中行事のむがし

第二部 早 物 話

早物語 早口ことば

第三部 わらべうた

子どもの呪文唄 遊びと悪口唄
子供の俚諺・戯れ唄

第一部

生物

昔は家畜は家族といっしよなら、

野の動物だって、ま・つ・と人間の身近に棲んでいた。

鳥類も歌を持つので親しまれ、

歌のない虫ケラにだって、

な・つ・こ・く童唄で呼びかけ、

また、む・が・し・こで語りかけた。

なべて生物は今よりずっとずっと人間のトモダチだった。

1 雀 と 燕

昔あつたけど。お釈迦さま亡ぐなした時な、ほの急知らせきぐど、天下の鳥こ達まで涅槃会さ駆づけただけど。

雀なの、お齒黒つけしつたけども、ほれも半端してとるものもとらなえで走たけど。

一方、燕えつぽうじゆものは洒落つぽくらこだもんで、こげた時あ人だがりすんべし、や・つ・ち・や・な・え（だらしない）恰好して行くど、さ・だ・げ・な・え（恥しい）どごだどて、白粉おつしよいつけだり、紅こ塗ぬたりして、めがしこんで出がけだどこだど。

んださげて、化粧さ時間かかて、法会さ間に合あわ無えばりが、勿論、お別れのお姿も拝めなえがつたけど。極きまり悪りがて周ひたちりの人達さ、

へ紅、鉄漿かねつけで 遅おそぐなたじゆ ——

て、んと申訳しつけども、誰も耳かしてくる者居ないけど。今でも燕の頬あかさ朱あかく紅のあどついだんべ。

ほげた訳で、えらい方達が相談して後で決めだごとだつけ。まず雀くわごとしては一番先に馳けつけたじゅごどで、これから人間の住む軒端のきば近ぐさ居て、こぼれ殻ば拾て食てもええて許さったど。

でも、燕つばきごとしては、遅おぐつだ罰ば冠へらつて、殻ば食うごと許さんなえばりが、毎日生虫捕て食て言わったけど。ほれで何時も、

へ土食て 虫食て 渋いじゅ——

て、言て暮すことなたべちや。

ほればりが、これがら死人あるたびに、欠かさず野辺送りのお伴をするようにて、きづく言いづけらったどごだど。ホラ棺の天蓋さ、今でも燕つばきこさえて四隅さくつつけんべちや。燕まだ南の国さ行つて留守してつ時でも、ほん時の言いづけは、ちゃんと守らへらつてるとごだろ。どんぺからんこ ないけど。

2 時鳥の兄弟

昔あつたけど。或所さ、兄と弟ど二人ばりで暮してゐる家あつたけど。兄まだ弁当もちで山さ稼ぎ行ぐど、せば弟は家さ残て家のまわりの仕事してつけど。

弟じゅあ、何時も兄どご大事に上げておく、気のええ男でな。今日も兄あ難儀して帰て来んべさげどて、来たらすぐ飯にするつもりで、早っから炊事出来して待ちつたけど。

背戸の山から採て来た山芋ば煮でだど。良え所はでつちり兄の分にとておいで、自分、まだ毛だらけの皮ば少しばり、昼間に始末したどこだけど。

兄さてんこもり盛て、「とつてもんめえ芋だけ、たんとあつさげ、えっぺえ食え」て勧めだけど。ところが、兄あ何虫の居所悪りがつたもんだが、急に機嫌悪くして八当り当んなだけど。

なるほど、芋を食てみりやんめえんだし、根性曲げだどこでなえがなや。弟が先ぎに良え所ばり選て、自分口さへしこんでおいで、俺さば残り屑ばとておいだ

んなえがど疑ぐたどこだべ。本当は端こや皮むいだ時の屑ば、勿体なえど思て、捨
なえがったなだ。ほれば煮で昼食したなだつたて、言いきかへでもききわけなえ
じょん。

何だ彼だて、あだりちらして、とうど、ええ所まぐらたがどうか、腹裂いで見
りや判るごどだて、やつちもなえ（無茶）事言い出す始末なただ。言争のあげ
ぐにや、兄あ頭さきてしまては、弟の腹さズブリ包丁刺しこんだけど。

ほしたら、腹ン中から出はて来たものでば、弟の言た通りで、芋の毛の生えた
皮ン所と屑ばり。んだもんださげて、兄あえぐながて（悪怏れ）悔むなだけど。
んだてもう遅い。

たった一人の弟ば死なしてしまてからは、なんぼ悔びて悔み切れるもんでない。
ほれがらじゆもの、がっかりがおて、弟恋しいどて泣いてばりいるもんださげ、
とうどう鳥こなてしまただけど。

この鳥こまだ夜昼なぐ、淋しぐなつと泣いで飛びまわんなだど。

へ弟恋しちや ポト裂けたか ポト裂けたか

今でも時鳥は弟の供養に、八万八千八百八声、喉から赤い血ば吐きながら鳴き歩くなど。どんぺからんこなえけど。

3 梟と鳥の仲

昔あったけど。ずっと昔は梟の商売は染物屋だったもんだ。ある時、鳥あ訪ねて来て、「俺の羽根ば誰にも負けなえ、きれいてきれいに染め直して呉ろ」て頼んだけど。

昔、鳥、まだ神さまがら白い色の羽根さぶがたもんだっけども、これだどあんまり汚れが目立つし、地味過ぎっさげやんだ、どて、洒落気出したどこだったべちや。

染物屋が言うにや、「きれいて言たて、何色が良んだが、いろいろ好き好みもあんべし」て、きき直すけど。ほしたば、

「天下第一奇麗によ、例えば何処にも見らんえよな、ほして誰も持てなえ、見だら直ぐ俺だて判るよな。ほげた色なえがや。光るよな色なら、なおさら良えし」
て言うけど。

そうは慾張て言わつても、おいそれど良え工面わいでくるもんでなえ。「いつそ、こつちさ任へてくれっこんだら、ゆつくり考えで何とかしてみんども」て、染物屋渋っけど。

ほしたら鳥まだ、「大体今言たようならば、任へっさげて、なじが頼む」つけど。

さあ、そこで考えに考えだあげぐに出来したなじゆあ、今の鳥の羽色だど。「鳥のぬれ羽色」で言えば黒光するんだし、ほれにこの色なら、ちよっこらさつと汚れも目立なくて、鳥も大喜びすんべど、自信もて仕上げてくつたけど。

鳥も出来上り氣に入つて、他の鳥達さも得意なて自慢しつたけど。でも体中どこもここも真黒けでは、本當ころも所、誰一人賞めで呉れる者居なえじよん。まるで山寺のお小僧さんの破れ法衣ころもみでえだ。前の方がずっと良がつたて言う者なばりだけど。

烏あこれ聞ぐどごしやげできて、梟どこ逆恨みして、まゆえ（弁償）どて、か
がて（襲う）行くけど。梟、まだ今更なじなるもんでもなえ。相手なた分損だど
て、烏の姿見つけと早々ど逃げんなだけど。

今でもこの時の恨みば根にもて、烏あ梟どこ真剣なて追っかけまわすし、梟も
おっかなくて、昼間うち、桐樹さかぐっていで、夜なて烏あとやさ帰てがら出は
て来て、稼ぐよになたけど。どんぺからんこなえけど。

4 行々子

昔あつたけど。貧乏暮しの家さ、女子童居でな、口減しどて小つちやえなに
奉公やらつたけど。長者の隠居爺さまの小間使いさへらつたど。

ある時な、隠居さまが大事だいじにしている上等の草履ば、片方見なぐなたどごだど。
てつきり何処どこがの犬いぬこでも戯れあそんでくわえで行ったんでなえが。若勢達、下女達総

がかりで家の周囲まわりは何度も何度も、床の下まで探さへらったけど。

ほんでもこぐらえど（不思議に）見つからないもんださげてな。皆な気めえやげで（苛立つ）、この童こが恨み持て隠したんなえがて疑ぐりかげる者なも出はて来たけど。

中にや、なんぼ立派な草履だて片方ばりじや盗でみたて何なんばや。跛なが履ぐんであるめえさげで、情くれる者なも居だし。悪わりごととして隠居さまにごしやがったな腹さもて、困らへてくれんべど思て、わざど隠したどごだんだて、いびる者なも居だけど。

童こごととしてあ、若しかしたら、隠居さまが何処どこが履いで行て、片方ば履き違えて帰て来たと言うごとも無いと限らなえ。そう思てあっちこっちの家さ行て、「お爺さまの草履、片方知らなえべが」て、聞き歩いだど。

何処さ行ても口振り揃えたように、「ほげたもの、触たことも、見だこともない。何処探しても見当らなえごんだら、あっちの芦原さ行てみんだな。もしかして犬こでもいたずらして、くわえで行がねど限らなえ」て、言て呉けっけど。ほんでや、

て言うなで千に一つの望みかけで、芦原さ行てみたけど。

芦の生え茂った所ば、あっちゃもぐて眼ば突きそうなたり、こっちゃ越えて葉っぱで手切つて血たらしたり、向う脛など蚯蚓腫れさせながら難儀して探し続けたけど。ほれでも見つからなえで家さ帰つと、やつぱり盗だに違いなえどて、きづく折檻されつけべ。こげえして、雨が降つても風が吹いでも、草履出はるまで探して来いどて、毎日飯もろくにあでがわんなえで家^まば出されんなだけど。

泣ぐ泣ぐ方々探し歩いだども見つからなえ。いどしいごとに、その娘童何時がのこめえ、とうど鳥こになてしまたけど。娘の怨みがこもたんだろ、芦原をさえずて歩く声も

へ草履^{かたびた}片方 なじよされんば

馬鹿じじい 馬鹿じじい やがましちや

て、きけで来るようになったけど。 どんぺからんこ なえけど。

5 鳶 と 鳥

昔あつたけど。ある時、田圃ともでの取残しの杭掛さ鳶が一羽飛んで来て、しよびたれ（しょんぼり）で止つてたけど。

それ見つけた仲のええ鳥まだ、何時もの鳶らしぐもなえ、何が心配あんじごとあんだな、どこが腑抜けでるようださげ、「何考えごとしたけなや」て、声掛けで慰めだごだご。

ほしたら鳶まだ、「他でもなえども、親のお墓どさは何処構えだら良えがど思もてな。思案余しつたなよ。友達のよしみで一つ工面貸して呉くつちゃ」つけど。ほしたら、鳥だて友達のこどだんだし、一緒なて智恵しぼたろ。

「どうだべ、山ン中や野ツ原よりは川原の方が見通し効いで、何処どっからでも拝むごと出来るだけでも便利でなえが。ほの上お墓のまわりさ、きれいな石こ並べて、何時もきちんとしてあげる。お水も絶あえず供あげられるさげで、俺だば川原をすめるな」つけしょん。言わつてみつど、鳶もその気になたが、鳥の言うごどきい

で川原さお墓築いだけど。

ところで、こさえてみると、雨が降る度に洪水出て流さんなえがど、心配でじつとしてらんなくなて来んなだど。んださげ鳶あ川原のあたりば低く飛び舞うよな時は氣をつけんなえ。きつと洪水になる怖れのあつ時だて言うもんだ。

とにかく、鳶あ鳥には騙さつたとて怨みごと言うし、鳥は鳥で川原でしよびたれ姿の鳶ば、

へ鳶アお山の鐘叩き 一日叩いて米五合

て、馬鹿にするどこだど。これまでとつても仲の良がつた二人だども、この一件からじゆもの、すっかり仲違いしてしまつたけど。

ところが、こんど鳥あ鳶に敵とられる番なだど。ほれじゆもの、春が来て鳥こ達巢造りいっしよけんめえだ時だつけや。鳥も他の鳥こ達に負けでらんなえじよんで、枯枝や樹の皮屑などえつぺえ拾い出したけど。ほしてや杉の大樹見上げで、「さで、今年あ何処ら辺の枝さ備えだら良がべが」て、思案しつたけど。

そこを、鳶が通りかがたなで、足止めさせで聞いてみだべちや。ほしたら鳶ま

だ、「今年あ何でも荒れ年だて言うつけぞ。風強いど、どうしても危えさげ、俺だば低い所さ営む勘定しった。低いたて狐や狸の手の届がなえ所さじゆんだ」つけど。

鳥ごととしては、鳶に本当の事教らったなだども、前にお墓の一件もあつさげて、きつとの事で、反対の事言うながもしんなえ。鳶の言うごと本氣にして聞いたら大事になる、どて根性ば曲げて高い所さ巢営むごとしたけど。でもこれあ鳥の氣のまわし過ぎじゆもんだ。強い風吹ぐたんびに、鳥あ巢ば吹ッ飛ばさんなえがど心配していねんねけど。

ほれがらきたいに（ふしぎに）、鳥あ高え所さ営んだら風年で、逆に低い所えらぶどおだやかな年さ当るんだな。鳥あ高い樹の頂天のまわりば騒ぎまわるよな時には、きつと大風になっさげて、試してみっどええ。

とにかく、これで鳶と鳥あますます仲悪ぐなただ。

どんぺからんこ なえけど。

6 みそさざいと鷹

昔あつたけど。何日も何日も空荒れだせいが、或所の一羽の老た鷹、まだ獲物なくて、腹空かして餓死ぬ思いしつたけど。よぐよぐ衰弱たとめえで、眼の前さ何よりの獲物が姿見せでもそれ追かげる元氣さえなくなつたけど。

チャツチャギ（みそさざい）まだ、ほれで可哀想なたどこだんだな。近所で熊の獅子が寝つたな見つけで来て、ほれ掴ろどて親切に教でくつたけど。ほしたれば、鷹まだ、

「こげた（こんな）態して居ちや、何が居だたて立ち向てなど行げるもんでなえ。ましてや熊の獅子なの自分の元氣な時だつてなじして適うもんか」

その惨めたらしい姿をみて、チャツチャギがからかうのかもしれない。そう僻んでるふうだけど。

「何なえ、先ず向うの山の竹やぶさ行んでみんな。熊の獅子がええで（恰も）死んだものみでえして寝つたさげて、ほれば退治つとて何だどこや。俺にだて出来

るこった」て、チャツチャギ言うけど。ほしたら鷹てんしやごしやえで、

「何ぼ何だて俺の何分の一、何十分の一しかなえ、めちやこい態てんしやして、ほげた大それた事なじよして出来んば。ほれ退治出来だら何でも欲しいもの呉つでやる。

俺のこのきれいな羽根とつかえでもええ」て云たけど。鷹としては、ごしやつぱらやげ（腹立ち）まぎれにとんだ約束したじよんは。

チャツチャギまだ「ほんでや歩あべ、勝負はほれがらだ」どて、熊狩の先立ちしで行たど。山さ着くど「さア見でらつさえよ」どて、チャツチャギはチョンチョンとさやずりながら、あつちの笠の枝、こつちの木枝ど身軽にわたつたつけや。

そのうち寝込んでた熊の鼻の穴からさつと腹はら中さもぐて、暫ぐ姿も見せなえど思たら、そんままだ鼻穴がら「上首尾だ」どて、大威気なて出はて来たどこだど。

逸いつちはや早く熊の心臓ば嘴で突き破つて出はて来たなだど。ほして、「そんま熊の獅子まだ伸びつさげて、ほしたら、たんとあがらつせよ」て勧めつつけ。

これで鷹もチャツチャギに助けらつて、何日振りかで餌さありづき、命拾たていうもんだ。約束どおり、お礼には自分わの大事な羽根あむして分げでやたけど。ん

ださげてな、チャツチャギまだ、あげためちやこい態ざんましてでも、羽根むしてみつと一升柵さ山盛量られつし、よつく見つど羽根の模様も鷹とそっくり同じだて言うなも、そういう訳だなだど。

こういう事あて後大分経つたんだな。鷹まだこんどだあ独りで、熊の獅子親子だえものが並んで寝転んでんな見つけだど。何時かあのチャツチャギでさえ熊の獅子の大物しとめだけさげ、元気な時の俺に出来なえてことあるめえてだど。しかも一度に親子二頭とも掴むかんど思て襲むかたどこだど。

さあ、爪の先ばいがらして熊の背中さじやつきり突き刺したべ。とごろがどうだ。熊の獅子達どてかっつべ（動転）して、起きつか起きなえが、親仔てんでこ（別々に）な方ちや向て突つ走たけど。ほれこそ鷹の力まだチャツチャギの何倍何十倍あんべたて、まどもに向えは熊の獅子さ勝でる筈あんめえでや。慾張りすぎて失敗。とうど爪拔がしてしまふ始末だけど。

「慾張る鷹は爪拔がす」ちゅあ、こっから出たごんだど。

どんぺからんこ なえけど。

7 蟹 こむ が し

昔あつたけど。或所あつどさ、子供持おぼこだなえ爺さまと婆さま二人ばりで、心細く暮たのぼそしたけど。或時、爺さま、沢がら蟹こ拵おぼこめで来て、自分わあの子供みでえして育てだけど。

んだもんでさげ、蟹こも爺さまさ馴れでは、干餅見せつと溜池せんすがらガサガサ這て来て、缺さはさで食うよなてな、めんごくてめんごくて大事して育てだべ。そんまおがて大きくなたけど。

蟹こまだ爺さまさばり懐くなで、婆さま少し烙氣したべな。爺さま干餅たがて行て食へでつさげ、妾もそうしんべがなて、爺さまの留守だこめえ、溜池せんすさかだがた（近寄る）どこだど。

ほしたば、蟹こあ婆さまどご見つけで、爺さまでなえさげ、こうやて拔げ眼まためしてにらめで、ほつても出はて来なえじよん。何たらやらしぐなえ（憎たらしい）つたて、て言つてるとさ、爺さま帰て来たけど。

何がんめこ（菓子）でも買つて来たもんだか、さつそぐ溜池の蟹こさ持て行て、食せる勘定したど。

へ蟹ここそこそ 爺いこそやーど

爺いこそア 来たぞやなー

て呼ばたれば、隠穴おろからガサガサ這い出はて来て、爺さまさたぐづく（すがる）じょん。菓子んめこ呉つたればほれ食て、爺さまどへいほでい（心ゆくまで）遊んでがら、機嫌よく隠穴さ引込で行んけど。婆さまほれ見で、ああすれば懷ぐんだなど判たろ。

或時な、爺さまの口真似して呼ばてみだど。

へ蟹ここそこそ 爺いこそやーど

爺いこそア 来たぞやなー

そう言たたて、蟹だて利口だもんだぞ。爺さまの言葉だて歌だていつつもど違うもんださげて、出はて来なえどごだど。

婆さまカンカンなてごしやえで、干餅ばぶん投げで立て来たど。ほしたら立つ

えがも早く、蟹ことしては干餅拾うつもりで出はて来たけちや。

それ見で、婆さまごしやえだの何のて、「何だてされや憎い畜生だちや」どて、山刀持ち出して来て、蟹こどこばじゃつきりど切ったぎったじよんは。

蟹ことしては大変だは、あんまりはつそく（激しく）やらつて命落したんださげてな。誰も見でなえと思つたところが、烏あ天上の方でちゃんと見届けであつたど。

夕方、爺さま何も知らなえで帰て来て、何時もみでえに溜池さかたがたべちや。
ぼんかた

へ蟹こ　ごそごそ　爺いごそやード、爺いごぞア来たぞやなー

何だべ、蟹あさつぱり出はて来ないは、こりや困たごんだは、どて、一所懸命呼ばたど。ほしたら天上がら烏とんで来て、こう言うこと言うけど。

へガアガアガア　爺いごそ

蟹どこ切ったぎらつてしまたちや

ガアガア

ほんでや、家の婆さまが蟹どこ憎いどて言うことあつけや、やらて（嫉妬して）

なじがしたな。まだ、

へ蟹この甲羅は家の前の苗代

ガアガアガア

何度も教えつけど。ほごで苗代さまわてみだれば、なるほど、甲羅ぶっこまつてあつたけど。

へ爺さま がおた（がっかり）がおたー

て、鳥あ後つづけつけど。

爺さま、おそこ知らなえ（素知らぬ）ふりして婆さまさきいでみだど。

「蟹こさっぱり出はて来ない。汝、蟹こさあだら（触れる）なえが」てだど。ほしたら、

「蟹さなのあだらなえ、鳥あくわえで行んけな」て、他人さかんつけ（所為にして）白々しいごと言うけど。

「鳥あ何して蟹こどこかもうどご。汝良ぐなえごどしたに相違なえ」て、婆さまどご言いぐるめんなだけど。ほして、

「烏あちゃんと見たて言う。婆んば蟹なば切ったぎって、甲羅かんらば苗代ひょうだいさ投げた、爺おやあがおた、がおたー言うさげ、汝なん殺したにちげえなえ」て、爺と婆さまだ、んんとええ（大変な）喧嘩けんかなただ。

それにしても、生物いさまんは童たちと同じだ。んまえ物もらえば懷ぐし、そうなりや情もうづるもんだ。どんぺからんこ ないけど。

8 ねずみといたち

昔あつたけど。働き者のいたちあ畑耕して粟蒔いたけど。朝早く起きて水かけたり、肥料こやしやったり、草除ったり、面倒見が良かったせいか、とつても稔り良くて上作じやうさくだけど。

いよいよ、それば刈りとつて河原さ乾しておいだじよん。そこさねずみあ通りがかて、

「ええあんべえだな。粟じゅものは刈つて一晚夜露さ晒すど、さがし易くなるもんだ」て、世話したけど。

いたちあ、ほんとき（本気）できき入れ、河原さほの粟ば拵げておいたどこだど。でも、なえだか気になつて、何時もより朝間早ぐ起ぎて行て見たべ。ほしたら乾しつた粟一束も其処さ無えけどは。

いたちごとしては動転したべし、それよりも人が折角丹精した物ば盗まつて、ごしやげでごしやげで、なんじがなるよだけど。

一体これは誰の仕業だべ。一粒も残さなえで盗で行くじゅもの、憎いぢや憎いぢや、後で判たら只でおがんえど思てるどさ、烏が飛んできたなで、直ぐきいでみだけど。

ゝいたちあ栗蒔いだ ギッチギチ

刈つ取り盗らなえが ギッチギチ

ほしたば、「おりや、ほんなもの知るもんか、カアカア カアカア」て鳴いで飛んで行んけど。

ほの次あ雀こ達寄て来たなさきいでみだべ。

ゐいたちあ栗蒔いだ ギッチギチ

刈っ取り盗らなえが ギッチギチ

雀達も、「おりや、ほんなもの知るもんか、ピーピーピー」て囀つて、これまた相談さものでくんなえけど。其処さ今度あねずみ通りがかたけど。ねずみなら昨日はあんげに親切に教へてくつだんだ。なじが良え知恵もあるめえが、

ゐいたちあ栗蒔いだ ギッチギチ

刈っ取り盗らなえが ギッチギチ

て聞いだど。やつぱり、「おりや、ほんなもの知るもんでなえ、チューチューチュー」て、足もよどめなえで、さつさと通り過ごしてしまたけど。

なえでも可笑しいぞ。逃げ足つくつて家の方さ行つた。これあ臭いぞて言うなで、いたちあこつそり後つけてみだ。気づがんえように、ねずみあ家さ入た後で、きつぷしあな節穴がら中ばのぞこんでみだけど。

いたちにのぞかつてるともさどらなえで、大勢の童たちまだ母親の顔見で大声

出して、「母^{かが}さ、母^かさ、夕^{ゆべ}な食^くた栗餅、ま[・]と食^くだえ」て、は[・]だ[・]る（催促）なだけど。

これ聞^きいで、栗盜棒はてつきりねずみの仕業じゅごと判^はたべちや。いたちごとし
ては大^おごしやぎしてどなり込^こんで、ねずみばいじめで仇^{かた}とりしたど。

ほん時、ねずみまだ毛むしらったなで、ほれで今でも毛が短^{みじ}いし、ほれさいた
ちの姿見^{すがた}つけつと、さっさと姿くらます性^{さが}分^わなたなだど。どんぺからんこ
なえけど。

9 殺生の名人

昔あつたけど。殺生^{いさまもの}ば好きだて言うが、この人まだ生物^{いさまもの}掴^{つか}え上手^{うまい}でな、弓や鉄
砲^{てつぽう}など飛道具^{ひどうぐ}ば一切使^{つか}わないで、変^{かは}った面白^{おもしろ}ごととして鳥^{とり}こでも大きいものでは熊
でも捕^{とら}る名人^{めいじん}だけど。

先^{まづ}ず、身近^{みぢか}なちちやこい物^{もの}では寒雀^{かんせき}捕^{とら}りなど、これにはひこぐしもばつたりも

なえ、ただ酒米撒いで食せつと雀こ酔つぱらつて、箸でもはさめるなで、ざくざく捕てくつけど。

雉掴める時には、こんだ殻さ薄荷を付けて食せつと、手掴み出来つと。何しろ雉じゅものは卵十二個産して十二ばみな孵えて育つようにて、十二の神つまり山神さまさ願かけで居んなで、ほれで飛び立つ時は息止めて一息飛びするなだど。ほごさスースーする薄荷食たら堪たもんでない。呼吸出来なえでへばてしまふべちや。

水泳ぐ鴨こ捕る時にはな、薯蕷すつて、ほれ流してやる。田圃の水口あたりの泡立つてるよな所さ淀むべ。ほごを鴨こが餌探して嘴でほっちゃぐつど、薯蕷くつついて鼻穴が塞がつてしまふなで、呼吸つけなえで、ころりどいう寸法だ。

ほれがら野兎じゅな、鷹のどこ怖がて、鷹の音聞きづけつど、すぐすぐで（畏縮して）しまふもんだ。んださげ、藁でマルどて輪をこさえ、そさ木の枝など差し込んで、兎めがけで投げつける。羽音みでえな音たてつさげ、そこで口笛で鷹の真似すつと、てつきり襲わつたと思うべな。近間の穴みつけて駆げごむ。そこ

ば後脚、手掴みすつとばたつきもしなえで訳のなえこんだど。

狢むじなは一番じようさなえ。見つけたら、「死んだ、死んだ」て、大声立てて古藁

沓でも投げつけでやつと、自分わがらその勘定して、ころつと転んで死んだ真似すつさげ、すかさず掴えで縛りつけるこつた。

熊ばりあ大つきいし力持ちださげ、まどもに向たんじやこつちが危なえ。ずつと昔には、よく熊獲りオツチヨをかける人も居だけつけどもな。熊は利口でオツチヨさ落ちでもほつても騒がなえ。オツチヨ背負てぢつと我慢続けで堪えでもんだど。なんぼでも重石が軽こくなたら投げ出すつもりで、ほれねらてだろ。熊あ息も絶たなえうち、うっかりオツチヨ外しさがると、自力でどうにがなんべつ言うあだりで、甦よめてきて暴れだすさげ、危なえもんだつけぞ。

熊のかがたオツチヨはずす（解体）には、重石の上さ木の葉一枚でも載せでがら、手を下すものだてな。ほうしつと、熊ことしては、これ以上重味を加えらつたからは、もう我慢も出来なえて、へとつと腰潰して参つてしまうもんだど。でもな、何処くかの郷で熊獲オツチヨさ旅人が誤て落ちだどがて、ほれがら全国何処

でも法度えなつて、掛けらんえごなたじゆんだな。

ところが、この名人の熊獲りというな、ほげた手のかがることではなえ。先ず茄子漬たがて熊獲りに行く。獲物見つけたら出来るだけ近寄て、鼻先さほれば打っからみつける。熊がほれ見つけつど、どでかつべ（動転）して動けなくなる。多分自分で胆つぶしてしまうなだべ。熊の胆ば茄子漬て言つてつさげな。自分の胆玉とび出したと思うなだべな。何したて、名人業はちがたもんだ。嘘だと思たら、どれでもええ、試してみんだ。どんぺからんこ なえけど。

10 おごさま（蚕）の始め

昔あつたけど。或所さ、めんごげた娘ばもつた長者居だけど。そこの家にや珍しい真白い若駒いでな。この馬こまだ娘こちや惚れで、ちつとも傍がら放れだがらなえけど。

馬の飼料^{もの}など、娘^{むすめ}が打込^{ぶっこ}むど喜んで食うども、他の人でや誰がやたても振向
ぎもしなえでな。ほしてや、厩^{うま}の前さ娘^{むすめ}の姿見せないど、厩^{うま}ふんざらたり、矢
来^{いま}ば嚙^かんだりして、とにかく暴^{あやま}つで五月蠅^{うるせ}くてお^おお^おえない（大^{おほ}変^{へん}な）ものなけ
ど。

畜生のくせして、依怙^{いこ}背負^{せお}てや^やらし^{らし}くなえ（憎^{にく}らしい）どて、若勢^{わくせい}達も娘^{むすめ}の
眼^めの届^{とど}かなえ所^{ところ}では、思^{おも}いしめ^めえ（存^{ぞん}分に）でこ^こくて（手^て荒^あに）くれんなだけど。
んださげ、若駒^{わくこ}も一^{ひと}そう根性^{こんせい}悪^{わる}くなて、ひねぐれるばりだつたろよ。

やがて長者^{ちやうしや}さまも、二人あ離^はれらんなえ仲^{なつ}えなてだごとさ感^{かん}づいだべ。何しろ
め^めん^んご^ごい^い独^{ひとり}り娘^{むすめ}だもの、良^よえ縁^{えん}があつたら智^ちもらて呉^{くれ}れんべていう矢^や先に、馬^{うま}み
でえな畜生の想^{おも}いがかがつたんでは大^{おほ}変^{へん}な事^{こと}だ。早^{はや}い内に二人の間^まば裂^ひいでしま
わねばていうなでな、娘^{むすめ}ば暫^{しばらく}ぐ遠^{とほ}くの親戚^{しんせき}さあずけるごどしたど。ほうすりや、
二人の仲^{なつ}もだんだん冷^{ひや}めんべていう訳^{わけ}だろ。何^{なん}とかかんとか理^{かん}屈^{くつ}つけで、娘^{むすめ}ば離^は
したどこだど。

これで若駒^{わくこ}の方も熱^{あつ}冷^{ひや}すかと思^{おも}たば、何^{なん}のや厩^{うま}の前^{まへ}さ娘^{むすめ}の姿^{すがた}見^みせなくなてから

どういうもの、何た事^{なん}しても一口も飼料^{もの}喰わなぐなたけど。娘どご恋しくて 秣^{うまひもの}も喉を通らなえじゅどごだろ。やがてにや、よぐよぐ瘦^やせおとろえで、背骨^{せんとほね}ば突張らせ、大き眼玉も乾からびてしよぼつかへ、見るかげもなぐなたけどは。

娘こ帰て、このあわれな姿見だらなじ思うべ、動転させで悲しまへつど、何時までも思に残つかしんなえ。むぞさえどもいつそのごと、留守のうちに思い切つて殺してしまたらとなたど。さあ、そうど決めだら早い程良えじゅなで、早速若勢達さ言いづげて始末させることしたど。

若勢達も今まで悋^{しん}気してだなだし、その上、昔の若駒のりりしい姿も何処さ消えだもんだか、何のい^いだまし^{だまし}気も起らなえがったんだな。厩^{うま}がらひぎだして来て、屋敷外れに生えった桑の樹の下で殺したどごだど。

剥いだ皮ば馬^{うま}こ繋いだ桑の樹さひっかけで乾して置き、残骸^{がら}ば穴掘つて始末しておいだど。娘あ何時帰て来ても何の思いも残さなえようにど心使てだろ。後厩^{あとまや}もきれいに片づけておいだべちや。

ところが、娘^{むすめ}としては遠く離れでも虫知らせたんだが、何が悪い事起ぎだ

んなえがど胸さわぎして仕方なかったけど。家の事が思い出さつて早く帰りだぐて、なじになるよだけど。そのうち気が狂いそうえなて、一目散家さ馳けづげだべ。若駒のこと眼さ浮んで来んなで、何事もなえでくれればど祈りながら急いだべちや。

ところが、部落^{むら}さ入んべどしたら、サツと突風が吹いで来て、身ぐるみ飛ばされそうなたど。かがまて風ば避げるかんじよししたどご、飛んで来た何が大きい白い物が眼の前を塞いだどもたら、すっぱり娘の体ばくるまいでしまたけど。

あれよ、あれよて言てるうちに竜巻になって、娘こクルクルと高く舞い上てしまたけどは。その後で何だか判らなえ小箱が一つ天から舞い落ちて来たけど。これはきつとの事で、娘達落してよごしたんだがと思て、大事によせで（仕舞う）おいだごだど。

娘の体ば被た白い物じゆは桑の樹さひっかけでおいだ毛皮だったどこみつど、死んだ若駒まだ娘どこば天国ささらて行たどこだべちやなや。人間さ思いかげた畜生の執念ておつかねもんだ。

今でもホラ、桑の樹さ馬こつなぐな、て言うてんべ。かういうごとあつたさげ
て、馬もつながらんな嫌つて、もし暴つて怪我あやまちでもしつと悪いさげてな。

とにかく、こげえな事になるんだつたら、若駒どこなの殺すんじやながつたと
悔んでみだたて、今更なじもなるもんでなえ、こんだ却つて親の方がおてな、寝就ねつ
く始末だけど。

ほしたら或時、若駒さのつた娘、まだ夢枕さ立つたけど。言うには、

「二人は天国で倅あじことせに暮してつさげ、心配しんな。何だつたら拾ておいで呉つた
小箱の中開げでみでくろ。きつとそさ虫こわいでくんべ。ほれ桑の葉ば大好きだ
さげ、それ食せで、俺達にわと思てめんどうみでくろ」てだど。

明るくなてがら、土間にわさ置いどいた小箱ばあげでみだど。ほしたら成るほど、
め・ち・や・こい・虫こがえつ・ぺえわいでだけど。言わつた通り桑の葉こを扱いで来て食せ
だら、だんだん育て皮おがむげる度毎たんびにきれいになて行くけど。

ほして、どの虫こさも、頭部あたまんどさ黒い型こがついでつちよん。よつく見つど馬の
蹄跡みでえだけど。んだもんださげ、若駒の生れ代りに違いなえじゆ事になては、

後で「お蚕さまのくらこ背負い」て呼んだけど。

ともかく、娘達の形見だと思て大事に飼てだれば、後でひけで真白い繭なただけど。やがでに、これがらきれいな糸をとる術も覚おべでな。とっても良えもんだじゅんで、何処の家でも養蚕おひさまおぐよになたなだど。どんぺからんこ なえけど。

昔あ百姓する家なら何処でもお蚕さまおいだもんだ。その時分のごど、正月過ぎつと、部落むらの婆さま達がおなかば（巫女）頼で来て神降したもよ。その時、神さまのお託宣ばきいだ後で、おしら遊びどて、なつても（屹度）このむがしを語つてもらい、養蚕の上作を祈たもんだ。

んだよ、おしら様で養蚕の神さまで、ご本尊は桑の樹でこさえである。長者の娘こと若駒まがどこを守てる二つで組だど。

このむがしおぐえば聞いた後で、婆さま達おなかばおひさま困んで、鯁焼振舞したもんだ。養蚕農家の女子衆の慰安で、毎年の楽しみじゅんだ。お蚕さまおがなぐなてがらは、それもこれも昔の昔なたごでえは。

第二部

正月に因むむがし

小正月の晩に、部落の家に童達が寄って、昔話をねだったものだ。小川筋の集落では、童達が開祖の家に集って、その夜廻りから、成木ぜめや、土龍^{もぐら}打ちなど手伝う。

駄賃に餅を焼いてもらい、甘酒を馳走なりながら、古老に昔話を聞ぐのを恒例とした。正月らしい昔話が語られ、童達もそれを正月の楽しみにしたもんだったという。

1 地ン蔵ど団子

昔あつたけど。爺さま何時もおんなじに、朝起きつど直ぐ土間掃除したど。
ほしたば薄暗闇で良ぐわがんえども、箒の先端さあだたあいばいだど土間の隅
こさ、団子粒みでえなもの落ちつたけど。

爺さま拾うべど思て手出すと、向うの方ちやコロコロと転んで行くじょん。追か
けで行て、そんま（直に）手が届きそうなつと、まだコロコロど、なんぼでも転
で行ぐけど。とうど、ねずみ穴さ落ちて行たけどは。

ほごで、爺さまも諦めんべどしたれば、団子、まだ穴の中で「来え、来え」（お
出でお出で）しっちょん。これあ何があんだがと思て、無理々々入つてみたど。
暫ぐしつど、だんだん広い所さ出たけど。ほして団子まだ相変らず爺あ先さ立て、
コロコロ転で行ぐなで、ついで行てみたど。

爺さま、「団子々々、何処までや」で聞いたど。ほうしつど、「古木沢の腰まで
や」て言うじょん。んだなや、団子と爺さまがかれこれどの位歩いだもんだが、

どこだんだが、ひよっこり目の前が明るくなたと思たれば、地蔵さまの立つてる所さ出はたごだど。

其処まだ少し盛こになった広場でな、今までコロコロど、転で来た団子まだ此処まで来つど、びたり止たどこみつど、古木沢じゅあ多分此処らあだりのごんだべちやな。爺さまそう思て団子拾て、ドッコイショど一休みしたど。

先ず団子の土ついだ所ばむしつて、良え所ばり地蔵さまさ供^あげで、汚つた所ば自分^わ食たけど。地蔵さまも腹へらしてたどめえで、「これあ、んめえ。親切にありがとう」どて、喜^あごで礼言うけど。

ほして「何が礼したえども、何あ良えが、欲しいものあつたら遠慮なし言つてみる」つけど。んでも慾のなえ仁だもんだ。「今^あんどご何も欲しい物も無え」て、返事したなだど。

「んでや、今まで何が困つた事ながつたが」て、きくじよん。「んだな。大した事でもなえども、ねずみに糯米ひがってしまて、正月来ても餅搗けなぐなたて、婆さまこぼしてゐる。ほれだて一寸ばり我慢すれやええごどさげて、ほれほどことか

いだ事でも無いべ」つけど。

「やあや、ほげたごとあたなが、ほれあ良くなえな。ほの悪^{わる}りごとしたねずみ達から取返してやんべちや。爺さまや、良え工面がある。もう少し寄て来て、耳かせ。今晚^{ばんげ}な、ほのねずみ達こさ集て餅搗きすつさげ、搗ぎ上げだどごば、そつくり奪^{ぶんど}取てくれんべ。お前まだ何処^{どこ}が隠つてで、俺が合図したら猫の鳴き声真似してみろてや。きつとねずみ達うろだえで何も彼も置きつ放して逃げつさげてな」
て、地藏さま工面授けてくつたけど。

ほのうち陽も落ちで、あたりもすつかり暗くなたべちや。ほしたばねずみ達のにぎやがに騒ぐ音近寄て来つちよん。地藏さまの陰さ隠つて様子うかがてたら、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」て、掛声かけて餅搗臼^{たが}担いで来ん者に、杵持^なた者も居る。藁束担いだ者^な、これまた臼の下さ敷ぐのだろちやな。木桶さ水入つて来る者、ちゃんと段取り良ぐ地蔵さま前の広場さからくて、ふかした餅米運ぶばりなてな。ねずみ達^だすつかりうがれて歌い出す者もいで大はしやぎだけど。

へ孫 曾孫^{ひこ} やしやえこ

ぞぞりこの末までも

ニヤンという音聞きだぐ無え

さあ、こしきの餅米運んで搗ぎ出すと歌も一段と弾んで来たじよん。ペツタン
コペツタンコで、多勢で搗ぐもんださげて、たちまち搗けんべちやな。手返しも
ポンと音の良えどごみつど、かれこれ搗け上たがなど思う時分、地ン蔵さま合図
してくつたけど。爺さま此処だどばり、上手に「ニヤオン」てやらがしたろ。

さあ、これ聞いてねずみ達大変だ。

「ほれや、猫え嗅ぎづけらつたんなえが」て、大騒ぎなたけど。今が今まで孫子
末代までニヤオンていう音聞きだく無え、て歌い囃しつたなださげ、大慌てで何
も彼も置ぎつ放しの散し放題、命からがら逃げつけど。

後で地ン蔵さまど爺さま、二人ばりして、「これあ、んめえ、んめえ」て、大喜
びして、搗ぎたてのホカホカば、じゅ・う・ぶ・ぐ・ご馳走なてな。ほれでもでつ・ち・り・残
たさげ、ほれな、婆さまさお土産に持へるごどしたけど。

その上、なお地ン蔵さま、まだ、「爺さまや、餅ばりえつぺえあても良え正月

あ迎えらんえべちや。ついだもん、ま少し待ちで夜明けでがら行げちや」て、
勧めつけど。ま少し経てば、鬼共、この広場さ集て来て博打始めつさげて、ほん
時ほの掛銭ば巻ぎ上げで呉^けんべて言うなだけど。

どっち途、悪い事して盗て来た宝物だもの、それ奪^とて何が悪りんば。ちようど
良え頃に、また合図しつさげ、ほしたらお前まだ、今度あ鶏になて時告げでみろ。
鶏じゅあ、高い所で歌うもんださげて、この梁の上さあがつて隠つてつと良えど
もな。梯子無えさげて、俺の体さ伝つて上^{あが}て行げ。構わなえさげ、遠慮なのすん
なて、地^シ蔵さま言てけつけど。

なんぼなえだて、泥足で地^シ蔵さまの体さ上るなて罰^{ばちやかぶ}当ることだどて、爺さま
まごまごしつたべちや。ほしたら、「早ぐしろよ。氣の早い鬼達来んぞは。見つか
たら何にもならない。ほら、先ず俺の膝株の上さ上^{あが}れ。上たがや、ほしたらこん
だア、肩さ上れ。遠慮してる場合じやなえ。ほしたら頭さ上れちや。愚図々々し
なえで、さつさどしろ」どて、わあわあて押し上げて呉^けれんなだけど。

爺さまでば、地^シ蔵さまに励まさつて言わつた通りすんどもな。

「勿体なえ、許して呉ろよ、南無阿弥陀仏……」どて、謝たり念仏唱えだりしながら、天井裏さ忙しく上て行て隠ったけど。

さあ、ほのうぢ、赤鬼、青鬼達、前の広場さ寄てきて、蓆敷いで博打始めだけど。大部出入あつて、もうたつぷりなた頃に地シ蔵さま合図しつちよん。ほうしつと梁の上の爺さま、扇ば開いで鶏の羽ばだぐ音立てでがら、「コケコッコー」て、大声張り上げだじよん。

「何だや、鶏鳴いだ、んなえが。もう夜あ明げる頃だがは。今日は何時もより早く鳴ぐんなえがな」て、可笑しがる鬼こも居だけど。そごさ「コケコッコー」て、二番鶏告げつちゆど、鬼共あ、「これあおつかね事になる」ぢゆもんで、掛錢ばぶつ散らしたまま大慌てで逃げで行たけど。

地シ蔵さま、まだ、「うまぐ行た」ぢよんで、ニコニコてな、爺さまどこ、「鬼共逃げで行た、もう誰も居なえさげ下りで来い」て、呼ばつけど。

二人して鬼達かつ散して行た宝物ばザクザクと寄せ集めでな、ほれば先程の餅さきだと一緒に地シ蔵さまの赤え腰卷さ包んでくつで爺さまさ背負せて呉ったけど。地シ

蔵さまの心づかいで爺さまど婆さま良え正月迎えだばりが、ほれがらずと樂々と過したけど。どんぺからんこなえけど。

2 嘘五郎の正月仕度

昔あつたけど。或所の部落むらでな、金持ちがぞつくり揃た中さ、貧乏暮しの家がたつた一軒挟とこまた所あたけど。

其処まだ婆さま息子この二人暮しで、息子でば嘘五郎て名前付いで、この野郎ぢゆ者あ、大変なへやみで、ほの上道楽者つめだったふうだ。

歳末つめ近づいて、もう正月来たていう時だど。婆さま精出して織た蓆蓆を売て、正月肴仕度しんべど思たべぢやな。嘘五郎どこ呼ばて、

「俺としよあ年寄としよて町さなの肴買しい行げなえさげて、お前行て来いぢや。この蓆売ればかなりの事できんべさげ」て、言たけど。

嘘五郎としては、町さ行けるもんださげ、「おい、おい」どて、二つ返事で婆さまの丹精して織た蓆ば背負て出がけたとこだど。

婆さまのごとしても、思た通り良く織れた蓆で、これなら良え値段で売れんべ。

大した仕度でないにしても正月のまねごとぐらい出来るちゃや。金持衆にやかなわなえにしても、たった二人切りだじゅこんで、嘘五郎なんたもの買つて来んだがど、楽しみして待ちったけど。そごさ嘘五郎あ風呂敷包みば首さ結なえで帰て来たど。婆さまでば、嘘五郎あどんぎ（上り台）さ腰下して旅仕度解くなも気前焦で、「蓆あねつづく織たなださげ、少しや値も良えけべな。何買えだや、肴だて正月中沢山だくらえ買えだべ」て、せづぐどこだけど。嘘五郎どから荷物取ろうとしたれば、

「何しる婆々、こさあ触ては駄目だ」どて、渡さなえけど。

「んだたて、ほのまましておけば、魚だらばうでん（生が下がる）べさげてな。

まだ猫にでもさらわんなえども限らなえし」て、婆さま氣もむどこだけど。

「婆々や、ほげたもんでなえ、何日おいだて大丈夫なもんだ」ていうじょん。そ

うすれや乾鰯ぐらえなもの、一体どうなつてんべ。可笑しげたこと言うもんだと思たけど。

ほのうち、嘘五郎あ包みば解ぐな見だらば、なんと中がら出て来たなは、玩具の豆太鼓と、何だか色粉みでえなものだけど。鮮魚なまごかななど一片も姿見せなえ。何も童子であるめえし、豆太鼓など買てなじよする気だもんだが、婆さまも呆れ果てるばかりだけど。

せっかく丹精こめで織つた蓆で、へぢけた（そんな）物買つて来るなんてと、叱つてみでも嘘五郎ごととしては不貞腐つたように囲炉裏端で腹あぶりして動がなえじよんは。とうど、年越も来てしまた。婆さまも大当外れで、年肴の無え淋しい正月ば迎えんながど思うど、情なぐなてくつけど。でも自分生わあなした子供おぼこだもんださげ、諦めるより仕方ながつたべ。

ほの内、嘘五郎まだ何処行ぐどこだが、立つて行たけど。屋外おにやさ出て雪原はつらひばポカポカとこいで、金持の家の屋根さすたこら上て行んけつけや。ほして天辺で小太鼓ただいで大声張り上げたけど。

へ上の長者も繁昌せ 下の長者も繁昌せ

中あ太ぐ エンザブロ エンザブロ

何したてかしましいもんだどて、その家の旦那まだ外さ出はて見だれば、囃し立でんな嘘五郎だじょん。なんぼ五月蠅えがらと言ても、繁昌しろどて囃すものを止めて怒鳴るなも縁起んなえ。今々、歳神さま迎えるいうなさけち・ついでもど思うど、ほどほど困てしまたけど。

これあ嘘五郎どこ、うまく騙して機嫌よく屋根がら下すに限る。そう思たなで、
「嘘五郎、嘘五郎、一寸此処さ来てみる。正月小遣百文呉れつさげて下りて来い
ちや」て、旦那まだやさしく誘たふうだちや。でも下りで来る気配は無いじょん。そこで百文が百五十文、二百文とだんだん競上て、三百文なれば、や々と太鼓の音止またけど。

嘘五郎は三百文もらて、よつくど札言うけつけや、ほの足でこんどは下の長者の屋根さ上ったけど。まだ太鼓始めだじょん。

へ下の長者も繁昌せ 上の長者も繁昌せ

中あ太ぐ エンザブロ エンザブロ

とうど、こつからも三百文もらて、都合六百文稼いだ訳だべな。大意気なて家さ帰て来て、婆さまどご喜ごばへたけど。

こんだ嘘五郎も早々ど床さ入つけさげて、婆さまごとしては、明朝あつさま早く起きで町さ肴買いに直すどこだんだなて思つてだど。ほしたら何処の家も寝静また頃、起き出はて来て、町がら買て来た色粉たがば溶がし始めたけど。それば茶碗こさ入つで、長んげえ芦一本用意したなど持て家たががら出はて行んけど。

何しつかど思たら、まだ長者達の家さ参て歩いで、外がら雪囲そがきはだげて、半戸前はんどめえさ置いつた正月餅めがけで色粉水吹いで歩くなだけど。後なて、長者の家で雑煮餅祝うべど思たれば、餅あかびつてつじよん。それ色粉だと知らなえで、

「何だべ、こんげ早くかび来るなんて、珍し年もあたもんだ」て、うんと可笑しがつけど。ほれさ、餅に青かび生えつど、上作の兆なげだて言たもんだども、こう赤かび生えだんでは早いどこ始末しないどな。でも捨なげるて勿体ない。嘘五郎どこで餅も搗けないでいんべさげて呉れでやつとええ、どて下女なげに使つて届げて呉つた

けど。

こうして、上下の長者からえつぺ餅もらて、嘘五郎も近頃無このじゆなえ（近来稀な）良え正月を迎えたけど。

「蓆売って正月肴買って来いてば、童子の玩具もちやすび買て来た馬鹿者」どてごしやえだ婆さまも、嘘五郎の工面にや頭下げだった風だ。どんぺからんこなえけど。

3 笠 地 ン 蔵

昔あつたけど。或所あつどこで、爺さまと婆さま二人ばりで、貧乏暮しかだなえしたけどな。

年寄の手じゃ、ろくな百姓どて出来なえもんださげて、他所がら藁もらて来て蓆織たり草鞋作たりして、ほれ売って米、味噌買て過したけど。

或時、婆さま、

「爺さ爺さ、正月あ来たもんだもの、町さ行て鯖でも買てきたら良えんなえが」て

言うじよんな。ほれで爺まだ冬うち、かがて織った蓆ば背負って町さ行たけど。

野越え、山越え、ずっと行つたれば、道端さ六地シ蔵さま立つた所トさ出はたけど。地シ蔵さまでば雪そがき囲もさんなえで、すつぱり雪冠トて寒そうにトしつたけどは。

雪の溜とこた所トば手で搔き浚とつて呉とつだども、肌の方はよぐよぐ凍とてしまて、地シ蔵さまの氷しがみでえなつたけど。

爺さままだ蓆を売つた錢で正月肴かえりを買う勘定して来たつたどもな、止めでは、笠ふきば六つ買たどことだど。肴かえりなの無えば無えたて我慢も出来る。吹雪ふきつさらしの地蔵さまがいいどしいどことだどて、帰路かえりにその笠ふきば被かへで、家さば空身で帰て来たどことだど。ほして、

「婆々や、地シ蔵さま、あんまり寒そでむづさえけさげ、笠ふきば六つ買て被せで来たは。肴かえり買いう錢けこ足んなえさげ、何も買いかねで来たぜは」て言て、家さ入て来たけど。

ほれでも婆さま何て言うがど思たば、

「ほれあ良えどした。地シ蔵さまなんぼが喜んだんだが」て、機嫌良ぐ迎えだ

けど。ほしてや、「爺さ、爺さ、難儀して来たもんだもの、早ぐ飯にして、よつく温まで寝んべはな」て、大してご馳走でない、雑炊すすて床さ入たどごだど。ほしたら夜中時分に、

へ甚兵衛 甚兵衛 戸を開けろ

地シ蔵あお金ひいで来た ヨーイサノー

じゅ掛声聞けで来たじょん。先ず婆さま眼さまして、

「爺さ、爺さ、甚兵衛甚兵衛、戸を開けろて言うんなえが、一寸起きで見ろ」て、寢床の上さ半分身起して聞耳立でつたど。ほしたら、まだ、

へ甚兵衛 甚兵衛 戸を開けろ

地シ蔵あ宝ひいで来た ヨーイサノー

て言うけど。今時分に何起きだどごだべ。大変賑おっかなえやがな音するもんだと思て、

爺さま立て行てみたど。ほしたら戸を叩ぐなは先触れで、後の方が威勢良ぐ車挽いで来るみでえだけど。

へこーれほどの大持だいもちは

江戸にも唐にも　ごんざるまえ

ヨイサノ

間もなく宝物ば山と積んだ車を挽いて戸の口さ着いだ人達をよつく見るじゆど、
昼間爺さまが笠呉つて来た六地ろち蔵さま達だけど。

積んできた重たえ荷物ばみんな家に中さ運び上げた後、こんど一人の地ち蔵さま
まだ土間の真ま中さ蓆敷いで、ほさ坐て鼻の穴がらポロポロと米粒ばこぼし始め
たけど。それが土間さ一杯なたでは、地ち蔵さま達も夜の明げないうぢにどて、
「爺さ、これ遠慮なし使て呉ろよ」ど、言いおいで、んんだら（さようなら）して
行たけど。

へこーれほどの大持ア　江戸にも唐にもござるまえ　ヨイサノ

家から出はてがらも、空車挽いて歌て行んけど。これで爺さまと婆さま、良え
正月出けだばりが大金持なて裕福に暮したけど。　どんぺからんこ　なえけど。

4 鬼婆ど正月肴

昔あつたけど。婆さまど息子ど二人、貧乏暮しかたなえしたけど。

歳末つめもさしせまて正月もま少しで来っどいう時、婆さま、まだ息子の太郎どこ呼ばて、

「太郎、太郎、正月もそんな来るもんだもん、馬挽いで町さ肴買ひ行て来いちゃ」
ていうたけど。

太郎まだ婆さまに使わつて町さ行て、魚ばえっぺえ買ひこんで馬こさつけで来たべ。帰路かえり、町はずった頃から吹雪こ吹つさらて来て大変だけどは。山ささしかがて杉林さ囲どまた所さ来たでは、とっぷり日も暮つて暗くなたけど。

無理して吹雪ここいで難儀して行くよりも、今日は此処で夜明して、明朝あつさまなら止むべさげ、ほしたら早ぐ出だすごどしたらど思てな。馬こどこば風の当らなえ杉木立さ繫えでおいで、薪集めて来て火ばどんどと焚いだどこだけど。

んだらば、魚一匹あぶて腹ごさえでもしつかなくていう処どさだど。ガサガサじゅ

音立てで、

「太郎、太郎、俺どさも鯖食へろ」て、鬼婆が出はて来たけど。

太郎、まだ、「駄目だ。これあ正月肴ださげ、食んなえなだ」て、断たど。

「自分食てで、他人食んなえじゃあんめえな、ほんでや、汝どこ食うぞ」て、威すけど。

太郎まだ自分食わってしまては元も子も無くなっさげ、仕方なし鯖ば馬がら下して、鬼婆さ食せる始末だけど。鬼婆、ほの魚みな食いあげだれば、慾張て、「馬食へろ」て言うけど。

「馬など大事で食へられんば」て断わたれば、「まだ食い足ん無い、汝どこが」て、いうもんださげ、怖ぐなてきて如何にもしようない。馬まで食われることなただけど。見でるうち、ペろつと食てしまうど、「こんどこそ汝番だ」て、襲て来らったけど。太郎まだ動転しては、胆つぶしそなたども、一寸の隙見でんだど逃げだけど。

山越え、野越えして、川ん所さ出はたでば、一本橋架ったけど。太郎が、ほれ

渡りあげだとき、婆さまやと追付いかつでな。あんげにまぐらてれば腹重だくて大変だったべ、足淀まへで、「こりや、こりや、太郎、ほれば如何なじよして渡て行たどこだや」て声かけつけど。太郎まだ、

「一本橋渡つ時じゆものは、袂さ石こ一杯入れで渡つど、体がふらつかなえで渡り易いもんだ」て、良え加減な事を教えたけど。

鬼婆、まんまどのつて、袂さ一杯石こ入つて渡たべちや。ほしたば橋の中頃さ行くじゆど、重みで橋あボギンと折つて、ダブンと水さ落ちで流さったべ。太郎あこん時づきだじゆなで、だがすかど走たけど。ほしてるうち一軒家見つけで、ほさ駆込んで梁さ上て隠つてたけど。んでも其処まだ鬼婆の隠家だったふうだ。

「あつや、太郎に騙さつて川さ落じて寒さみ寒み、みな濡つてしまた」て、ブルブルじゆ格好して入て来たけど。ほして来るえがも早く囲炉裏さ火ばどんどど焚えて暖だつけど。でも太郎あ隠つてつ所嗅付けなえどこだべ。

「こういう時あ、甘酒でも呑んで温まんべな」て、甘酒鍋かけて背中炙あぶりしんなだけど。ほのうち鬼婆は先程さきだの疲れ出たが、馬こまでかつ食くらたなで満腹いんだし、

ゴンゴンて高軒かいで眠てしまたけど。

ほうしつと、梁の上から覗のぞんでだ太郎まだ屋根裏から葦あしば引っこ抜いで、かぎのはな（自在鉤）さかがた鍋の中の甘酒あまじゆはピーッピーッて皆すてしまたけど。ほのうち婆さま眼めさまして、「あや、何時いつの間に眠こめむたとめえる。甘酒も煮干してしまたな」て、太郎あ天井がらすすり上げだな氣付かないでつけど。

婆ばんば、当外たうがいったもんださげ、こういう時あ寝るこつたどて、

「さでど、石のからどうさ入いつて寝だらええが、木のからどうさ入いて寝だらええが、寒さみ時は、木のからどうさ入いて寝だ方かたえんだな」どて、寝所さ行んけど。

太郎まだ婆のよつく寝づいだどこ見計みけらて、梁がら下りで来て、いよいよ退治さかがたけど。先ず囲炉裏さ薪きばだんださつくべて、茶釜わがしたど。ほして婆が入いつてた木のからどうさ、雖いえで穴あなばあげつとこだけど。雖いえもみ出すと鬼婆おにば、まだ、「隣のキリキリ鳥どりあ叫こゑぶな」ていうじよん。ほのうち穴あなこがらお湯少し注いでやたれば、「熱あついちゃ、沸ふツちゃ、福娘ふぐちよこ子の小便せうべんだが」ていうけど。婆あ寝呆ねどいでっさけだ。今のうち急いで櫃びの中がら出ではて来れないようにしてくれんべどで、

繩持て来て、蓋ばが・んがど結つからげてしまたけど。

へどんびつ唐櫃 すつ唐櫃

すかすかきんかの金覆輪のぐーずぐず

て、穴から熱い湯ばジャーど注いでやたけど。婆、熱つがて嵐気なて暴れんなだども出はて来れなえもんださげて、

「熱っちゃ、熱っちゃ、太郎だか、太郎だら許して呉ろ。こんどからほつても悪い事しなえがら許して呉ろ、俺あ宝物みな呉^けつさげ、どうがご免して呉ろ」て、泣ぎ声立てで詫^{わづ}しつけど。

太郎まだ「こんだから、ほつてもなえ人の困るごどしんなよ」て、念おして婆どごば許してやったけど。ほん時、鬼婆どから貰^{もら}れた宝物で馬こもまゆわ^{ゆわ}せ（償わ^わせ）だし、鯖も買い直して、良え正月したけど。どんぺからんこ なえけど。

5 鰈の年越肴

昔あったけど。或所で大金持ど貧乏人が隣合せて住んでいたけど。

正月来たでば、貧乏な家ではな、何の仕度も出来そもない。それでも自分達我慢すれば、年肴なの無えば無えたとて済まへつども、せめて歳神さまさ供^あげる分、生臭物一片でもなじがしでえもんだて思うなだけど。

かたえつば

一方、金持の方は、ここは他所の家ど違つて、ずっと昔から家族みんなさ鰈の大きい切身ばつけんなが家例だけど。んださげ朝早ぐ若勢ば肴買いに町さ使いやたけど。

ところが若勢戻て来ていうには、町中の鮮魚屋^{いさばや}、どごもここも聞いて歩きあんしたども、浜あ不漁で、荷あ入らなえ、やつとのごとで鰈ば二片だけ見つけで分げでもらて来あんしたどて、たった二片^{きれ}つん出してよごしたけど。

旦那さま、それ見て至極腹ば立でなすつてだど。家には何人家族^{ひと}居んだ、こればりの切身でなんだごととして間に合へつどだ。どてな、その魚ば屋外^{おにや}さボエン

と投げてやたけど。傍で見でる人達あ、勿体ないごどするもんだと思たども、拾たりすつと、旦那さまどこ一層ごしやがへでしまうばりだべさげ、触らぬ神に祟りなしで知らなえ振りしつたど。

ほしたら、間も置かずどつかの猫が嗅ぎづけで擡さて行たけど。猫としては思いがけないご馳走どささありづいだなで、大喜びだったべ。

さでど、何処どさ行て食たら良んだがとなつて、猫の足の向いだ方は貧乏人の居る隣だけど。こつちなら気兼ねいらなえし、誰も追つ立てる者も居まいど思て、来てみだどころが、何処から現われたか、大嫌いな犬畜生に吠えつがつてな、動転して、いがみ返したら口から魚が離れてしまった。後は犬に追おわつて一散に逃げるばりで、とうど猫もこの鰈と縁が切れでしまたけど。

そこさ貧乏な家の息子が通りがかて、雪の上さ落ぢつた魚ば見つけたべ。こげた所どさ、こんげに立派な切身ば置いてるなで、何じゆ事ごんだろ、普段は他所の人の歩く所でもなえさげて、落物でもなえだらうとて、誰か恵でくつたものか。今朝がた婆さまど正月来たども、神さまさ供げる肴もだなえて話したどごだった。誰

か親切な人が聞きづげで、こつそり恵でくつたなだらうがな、て、その魚ば捨て来て年越肴にしたけど。

たった二片だとも親一人子一人だもんださげて、とつても喜なこんでな、「我が身好かれ、人の身も好かれ」どて、滅多になえ佳ええ正月迎えだけど。

ほれがらじゅもの、何じゅなえこんだが良えごどばり続いでだんだん家運上向いで来たけど。ほれで此処の家ではずっと今でも鰯なえば年肴にして正月迎えることしてつと。

その隣の家はて言うど、鰯なえば粗末してからじゅもの、良え事無しで、だんだん落目なて行くばりだけど。

年肴粗末しつと貧乏しかたなくなつさげな。年越の晩のお膳の肴あしたば皆な食なえで、明日さ少しでも残して置がなんねもんだぞ。どんぺからんこ なえけど。

6 産女の化物

昔あつたけど。昔あな、百姓あらがた者あ、米ば作つても自分わ口さなのながなが入れつとこなくて、大方年貢米で納めなんなえがつたど。ほれで飢饉けがちさでも当るんだらばは、皆死ぬ苦しみばしなんなえもんではな。

ほごさ子供おぼこでも生つてみろちや、嬢んまてば働ぐ手休めねばなんねえべし、童おがれば食う方だて卑めだもんでなぐなんべし、どなつと、生つてきた子供ばやば罰かぶても何じがさなんなえ、口減くちへらしに間引ぐより仕方ながつたべな。長男もんこどか、姉娘もんこどか、先に生つた者はどうやら家さおがつたべどもな。おじこ、おばこどなつどは、猫仔みでえに藁苞あつたなぐさ入れらつて始末さつたもんだふうだ。

或所あつたなぐで貧乏暮おぼこしつどさ、子供生つたなで、苞つつさ包で流す勘定したど。ほさ何も知らなえで、そのの本家の爺さま顔出したけど。訳ば聞いて今日は仏さまの日だ、何がのお引合せがもしんなえ、ほれ始末しんなば止めで、家さ置くごとしんだ。若し何としても立つ瀬なぐなたら、そんな時あ俺が親代りになて面倒みっさげて情

くれつけど。ほんでや、爺ちゃんに捨てもらうがは、どて、ほの子供捨なげなえで家
さ置くことしたけど。

昔せんにや、こげたなば「苞せこ外れ」て言たもんだ。汝達にしやだもきかなしで親達困らへつ
どこみつと、苞せこ外れでんなえがな。家さ行たら聴いでみろ。俺あ苞せさつたごと
無えがて、親達の言うごとよぐきかなえど、まだ苞せされつかしんねな、おどなし
くて良え童にならなえど、なや。

むずさいごとに、苞せこさつた子供達まだ年越の晩なつと、この世さ生き残た童
達の賑けなりがな声聞ぎづけて羨うらやぐなてくんたな。靈魂たまへになて娑婆さばさ出はて来だぐなん
なだど。怖おっかなえんでなえが、年越に晩飯食てがら廁かばやさ大便はばたれ行くど、白い着
物着たザンバラ髪うぶめの産女いなが稲部屋いなの隅こあたりがら出はて来て、生れだての
嬰子あかこおぼこつん出して、「これ、一寸抱いて呉ろ」て、頼むなだど。

気味わりごどな。んださげてな、年越にや遅ぐなてがら廁かばやさ行がなえよう、明
るいうちに行て勘定しておぐこつたな。どんぺからんこ　なえけど。

第三部

修身のむかし

昔、学校で『修身』という課目があった。

子供が狼に追われた話で、『正直』を説き聴かされた。

伝承の昔話にも、これに似た語りがたとある。

語り部が「どんぺからんこ 無えけど」と結んでから、なお大きく息を吸い、「んださげてな」と、勿体ぶったら、そのむがしは大方その類だった。

1 厩がら逃げた牛

昔あつたけど。或時、あつとき家え中みな昼寝しつたど。其時、ほんとき婆さまうら（便所）さ立つべと思て、も厩まやの前さ来たば、おもて厩中からつぽだじよん。「あらやは。牛また厩の矢来棒外して屋外さ逃げだなだべが」て、よつく見つど、背戸の畑さ行てだどこだど。

牛でがらじゆもの、婆さま独りで手に負えるものでなえさげ、早ぐ家人達さ教へんべと思て、も大声あげで叫さかだど。ほんでも誰一人出はて来てくんえ。このまましてつど、畑ば踏みつぶしてしまうんだ。ほんねたて青麦もなのみな食つてしまふべちや。何としても誰がどこ頼まんなえと思て、家あがさ上てみたど。

ほしたば爺さまでは囲炉裏端さ仰むぎ打ち返つてるし、兄まだ半戸前はんどめさ腹這い、炊事場みじやの隅こから寝息もれでくんえ、きつとのこんで嫁あねこだんだろ。みなでん・でこ（各自勝手）なて寝がしやて、なんぼ呼ばたてこ知らぬ振りこえで起きつちゆ無えじよん。婆さまも困り果てでしまたんだ。

「待で待で、良えごどあんど。爺さまは唄この好きな人で、取分けであがらしやれ氣に入りだ筈だ。牛逃げたことば歌で教へだら機嫌よく起きんなえべがど察たど。」

この唄こは人さ酒勧める時ばりんなえ、山桑摘みン時もよぐ歌たもんだ。傾斜の下前さ居で、木挽脚に構えで歌うど仕事はが行ぐどてな。ほしてこの歌、途中で一度しか息ば吸わなえ、扇の地紙みでえに、先細く静がに出して、後ば太く高く止めんなが上手なコツだとさつだもんだ。

「んでや、爺さまの耳元で、一つ上手に出してみつが」て、歌たどごだど。

へ背戸の畑 牛逃げて行たぞや

早く掴めなえど 麦食うぞ

ほんでも爺さま、まだ腰痛いさげ、兄どこ頼めどて起きようどもしなえ。寝返りぶつた後、訳も判らないごどもにやもにやつて言てだけど。

婆さまごととしては、爺さまがかげん悪り（病氣）ごんだら仕方なえど思て、兄あ方ちや向たべちや。兄は冷だえ板の間さ腹這いなて、氣持ち良さそうに黙けつた

ど。

「よしッ、兄の得意な〴〵在郷の濁酒唄だ。この唄よぐ歌えつと唄上手どさつだもんで、酒盛ば賑はへるばりでなえ、田の草除り作業にも歌うんだ。

へ草を除るとも花摘むな

て、掛声かげだら、きつと兄も飛び起ぎんであんめえが。

へ背戸の畑さ 牛こ逃げだノンヤレ

早ぐ掴ねど 麦食うぞ

スチャヤレ コチャヤレ

どうしたごんだが、これも起ぎつどもしなえで、腹痛えさげ嫁こどご起してやれじゅごんだ。その嫁こだて何処居だもんだやら姿見ねえ、でも探したら炊事場隅の涼風の来つ所き氣持よぐ横なてだけど。

嫁この十八番は〴〵大沢おばこだ。これあ摺臼挽シ時によぐ歌うもんだ。疲れこんで来た時、おばこ節きけで来つど、摺臼あ独りではずんで来るてな。ほさ、親の前でど、重い荷物背負たまま坂道上りながらこれ歌えだら一丁前あるて言わつた

もんだ。

「どれ、ほの氣組で、嫁あねこ起すが」どて、婆さま若え声つくて歌たどこだど。

へあねこ起ぎで呉ろ 厩の牛逃げた

早ぐ掴めなえじゅど 畑の麦食れる

ほの嫁あねこも頭痛いどて、ちよつこら起ぎそうもない。婆さまはどうど手あげも
うしたけど。あんげに家え中じゅ唄好きで歌つてさえ居つど、飯食まなえたて良えくら
いの人達なんだども、今日は如何なしたが、大事な時ていうど骨惜みしつさげ頼り
なんなえんだ。

そのうち、牛うとしては、青麦ばたらふくまぐらて、じゅんぶぐなたんだ。独
りで厩う中じゅさ歸て来て寝転がて、かみげえし（反芻）しつたけど。

どんぺからんこ なえけど。

他力ひかけそくばりすつと、はずつた時の失敗そんが大きい。氣つけねんねな。

2 馬のまぎめ

昔あつたけど。大家の旦那じゅあ、馬の目利の秀った仁でな、或時、出入の親仁に、馬ば馬喰すつ時にや、どういう所さ氣つけるもんだがてきがったけど。

ほしたらば、先ず馬の陰相みるごどだて教へでくったけど。つまり馬の振じゅんだ。ほれで目算の良え馬だかを、よつく見んなだど。

次は「ありぎ」見るどええ。挽いでみて馬の歩き姿勢を見つど、達者だか脆弱馬だかすぐ判る。三番目は口開けて、馬の歯を見るとあらがた年令が判るもんだ。

ほれがら次に大切なのは毛巻きだじゅごんだ。人間だて、頭さ巻目の二つある者は意地悪だの、さらばお倉が二つ建つなというくらいなもの、馬だて生物だ。これも一応勘定さ入んなえど良くなえてだど。

昔から「肘筋 ひつつし 双紋 そうもん 笠の下」てな。肘筋は馬の後脚の曲り目さある毛巻のごと。双紋は胸前の所さ二つ巻目のある馬こで、笠の下は首のつけ根で、丁度馬さのど冠た笠の雨だれ雫がポタポタと落ちんだ、其処さ巻のある馬の事だ。まあ

こういう所どさ巻あつど嫌わつて、他所ほかがなんぼ良えたて駄目だとさつたもんだ。
肘筋のある馬に蹴たてられつと、一生治らなえ片輪で過さなんなえて言たもんだ。
また双紋の馬ば飼たてと、其処の家の総領ツ子に崇るとしたもんだ。笠の下て言えば、
昔の武士ならやおいてて言て、なんぼ矢射ても的さ当らなえて、この馬も嫌きらたじゅ
ごんだ。んでなくたてこげた馬はよく荷鞍つかい当りして、役馬にや向かない。他にも
三光となつど、額さ巻目の三つある馬に、これも「産礼汚す」て言て嫌うもんだ。
とにかく、馬喰は今までの飼馬ば飽あぎさせで、早はぐばぐらせ（取替）たいとか
がんばさげて、他人の所有ものにはいろいろ難癖もつけんべども、自分わ手あさ入つと、
いうた事こともころつと變つてしまう。

つまりは、肘筋ていうなが誤で、あれは「汗絞あせしぼり」が本当で、双紋も「紐立紐立てて
いうもんだ。紐立じゅあ羽織を附ける所で、羽織を着るような裕福な身分にな
るじゅ意味で、却つて喜ばれるくらえだてだど。

川所さ行くじゅど、喉の所さ巻あるど「波分」どて、「波分は買つても附けろ」
て、もでるんだど。ながなが馬喰もならべる（法螺を）もんだな。でもそのくら

い当り前だろ。「馬喰の八才、十八才」て言うさげな。どんぺからんこなえけど。

もしか、そういう馬たが持たれば、筋の良え馬にしか巻は無えもんだと思て、気にしない。その馬こさ惚れごんで扱あつかうこつたな。とにかく、馬の巻目など好き嫌いするようでは、すぐつた馬使いにはなれなえな——大家の旦那にもそう教へらつたけど。

3 馬喰と山姥

昔あつたけど。或時、馬喰あ秋田の競市さ馬こ買い行たけど。欲しいじゆ人達から頼まつて、二才こ馬ばたと買いこんで、独りで挽いで来たじよん。

馬喰つなぐどて、前の馬この尻毛さ、後さ立つ馬このたてごの綱ゆっつばえつくくらえ（適當）の間おいで結付け結付けする。ほして先さ立て先頭の手綱ば手さ持てひいで

来る。これだけの馬を捌げば大儲けも出来んださげて、馬喰唄でもふんざらて威勢つけで来たもんだべ。

家さ着いでそれぞれ馬こひき渡す時には皆どこ招んで蒼前祭もしんなえ。そんな時の肴も秋田で買えば、生の良えなが安ぐ手さ入る。さいわい鯖見つけだんで、でっしり買いこんで強い馬あらこの背中さつけで来たどこだど。

いよいよ里ば離れて山申中の一番きづい峠さ来がかたじよん。この難所さえ過ぎれば後は下りが多くなて、そんな俺方おらほの領地ださげて、ほうすりや慣れなえ所でもたのぼそく（心細く）無くなる。馬こ達も早ぐほっちさ出た方が楽なんべじゆなで道足急がせだどこだど。

ほのうち、何処か遠くで鶏の声がきけで来るよな氣したけど。こりやそんま村里さ出んべど思て歩き続けたけど。ところが路ば間違がて林中の繁みさでも踏みごんだが、まだ夜間なる時分でもなえのに、少しばり周囲まわりの様子おかしくなて来たけど。なえだか薄暗くなたもんだと思たば、山姥出はて来て行先さジャエンと突立つてはっとかけたけど。

「馬喰、馬喰、汝、鯖持ったべ。ほれ俺ちや食へろ」て、おどがすべ。見つど山姥では胡麻塩髪ばザエンと冠て、口では耳のつけ根まで裂げでだど。おっかなえもんで、後首筋の髪毛が自でよだつて来るよだけど。

「一匹ぐらえなら仕方なえべ、食へつかない」どて、馬の背中の吠の口から、ちちやこいな探してつまみ出そうとしたら、

「ほんだもの一匹二匹食たて食た気しなえ、皆おろせ」て、威張つちよん。おっかなえもんださげては、吠のまんまあずげて、さつさと馬こひいで逃げる勘定したど。

「こらッ、馬喰待て、こんな事でや腹の足になんない、馬こほんげにいだもの、一匹食へだて何でもないべ」て、言い出したけど。まさかど思た馬こを狙わったんださげ、動転してしまた。たとえ鯖なの食つても身欠鯨なら家の方でだて手さ入る。馬喰祝いにや、ほれ使て当然なだども、馬こば食つてがらじゆもの切角の儲も、元も子もなぐなる。「これだけは勘弁して呉ろ」て、手すつたども、山姥は何たて食わなんない、食へなば汝どこ呑むぞどておどすけど。

馬喰もまごまごしてつと大変な事になりかねなえさげ、一番後さつないだ馬こなら仕方なえが。大分と脚も疲つて来て、他の手足まどいなても悪りし、ほれにこの中で一番と値も落ぢんなで、むぞさえども綱外しておいでくる勘定したど。

ほしたら山姥では、「ほのままでええ、どうせご馳走なんなら、つながたまんまがええ」どて、馬こ一匹のつもりが見る見るつるつると皆呑みごまったどごだど。

ほして、「いよいよ馬喰、汝^{にし}あ番だぞ」て、むがて来て、あぶなぐ嚙みつかれそうなたども、わらつと（一瞬）、退^{すさ}つて逃げ走たどごだど。山姥も諦めなえで、重だえ腹ば引きづるよにして、何処までも追^おかげで来つちよんな。

坂道^{くたりかけ}さ出はて、だがすかど（一目散に）走たは、大きい沼のそばさ出はたけど。

さて此^こ処^つから如何^どしたらえがんべどて、一息入れで考えだど。だて舟にするものも橋へなるものも見当らなえ。そのうち「こらッ馬喰待て」て、怒鳴る声近づいて来るもんださげて、谷まてしまては、沼のへり^{びつきあが}さ生えった松の大樹さ、すたこら蛙上りして、息殺して、たぐついでいだどごだど。

そこさ山姥追いついだべ。んでも樹の上さ居るごど気付かなえで、沼の水さ馬

喰の姿映たな見つけで、ほれば一呑みしんべどばり飛びかがたべちや。ほしたら、あれだけかつ食らた後だし、体が重だくて、ぶくぶく沈で行んけど。ほれこそ切ながて水ン中で嵐気なて蹴ぐど。ほのたんびに呑みこんだ馬こばピヨコピヨコと吐出してよごすけど。

水さ浮んだ馬こ、まだ息吹き返して岸さ泳ぎつき、丘さ上て来つと、ブルンブルンと身ぶるいして水気切っけど。馬喰はそれ見で、身ぶるいするくらいなら大丈夫だ。これはしょうぶした（儲かった）じよんで、皆寄せで元のように馬喰繫して家さ来着いだど。

家では、馬こ頼だ人達ば招て来て、賑やがに蒼前祭したけど。鯖は山姥の腹ン中なたんだし、今までみでえに身欠鯨買てお祝いたべ。身欠鯨ばそのまんま焼ぎも煮もしなえで、三本一緒に三つに折る。つまり九つにして塩つけで祝たどこだど。

折鯨どて、三つ折九層倍にも儲がるようにていう縁起ですなんだど。馬喰もこの度の馬こでや、んと儲がて、やがでに大きな厩もふやして長者になたけど。

どんぺからんこ なえけど。

折鯨は女子のさんよけ（安産）のお守まもりなつどて、近所や知合に孕み女子でも居
だら、馬喰のあつた家からお裾分けしてもらて食せだもんだ。

生鯖がなんぼ珍味めずらしで言たて、昔からのことは捨てらんねな。

4 猿と雉のよれえ田

昔あつたけど。猿と雉まだ隣合せて山田持つてな、春野始またら二人あ田で顔
合せだけど。

猿あ先に来てで、畦畔のさ坐て一服してつ所どき、雉あ来着いだなで、

「おり煙草十八服で言たもんだ。一服してがらがれちや」て、誘たべ。雉も「ほ
んでや」て言うなで、二人あ並んで腰下して一服したどこだど。

「田植さつぎは賑やがなほど果はが行く」どしたもんだ。独りで稼ぐなは徒然とじえんでつまらな

え。何時もこうして話相手が居つちゆど、仕事飽ぎなえで、手の運びも良がんべぞ。「いつそのごと、共同田よれえにしたらどうがな」て、猿の方がらもちがけて来たけど。

雉も人好えもんださげて、ほれや良がんべじゆなで、猿の持ち田ば先にしてよえしたけど。初めは双方とつても都合良ぐ行て、めでたぐさなぶりも出がして祝したとこだけど。

一息つぐえが早い、直ぐ田の草除りだ。「もう何処の家でも一番草始めだつけ、俺おら達だも苗さしてかれこれ半月にもなんべ、田の草も除らねば」じゆなで、雉まだ猿さ相談行たけど。

ほしたら猿また、「この処しこ、何た按配だが軀の具合悪くて、ずっと床さ就いっただて、帯ひろ裸で囲炉裏端で腹あぶりだけど。雉あ、ほれ見で本當にけえなえ（病氣）などと思たべ。」

「ほんでは仕様しょうはんなえな、大事しろよ、俺だけでも田さ入て草除て来んべ」て、独りて田の草除りしたけど。しかも猿の田も自分わどこの田も同じように、ねつづぐ

仕事して来たどこだど。

一番草終えで、二番草なても猿は寝がしやて、田さ下りで来なえじよん。雉ばり二軒分の田ば持たがたみでえで大難儀したべちや。猿も余り横着こえでも良くなえと思たもんだが、三番草になたれば長着物脱いで股引はいで田さ姿見へだけど。

三番草て言えば、止め草どしたもんだ。

「十六娘と三番草はぶんなぐり放図」て言て、一番難儀などこも済んだんだしは。鴨こみでえ、カポカポ攪かきまぜしただけでも良んださげなや。

今まで雉のごとしては、両方の田ば陰日和なぐ面倒みたつもりだども、元々肥料こやし気が違てたが、なんぼが雉の田圃の方が稲ほげ（ぶんけつ）良がったどな。根性この悪い猿、まだほれ羨ましくて、何としても雉になの負けでらんえどて、こんど邪魔するつもりで雉の田さ入って、らっばらっぱぎ（嵐気）出して攪したどこだど。

ほれど言うな、稲の根ねつこ掘ほ浚さらえば稲の生育おがりが遅って、稲刈時なたら猿の持ち田にかなわなぐなり、雉の負けなんべじゅ勘定で、だがすかど（熱心に）掘浚た

ど。ところが、猿の考えどは裏腹に、後へなて雉どこの稲はうんとほげて上作だつたて言うことだでや。ずるい事しつと罰かぶるもんだじゆ。

どんぺからんこ　なえけど。

田の草除りは、稲株の根っこ盛こ築かないで、却つて根っこ開けろて一言たもんだ。猿知恵も結果は、かつちやま（逆）だったんだな。

5 猿ど蛙の餅泥棒

昔あつたけど。薄暮方ひぐれがただったつけ。何処どっかで餅搗始またどめえで、山まで威勢の良え杵の音ひびいで行たけど。ほれ聞きつけた野猿やまのあにまだ餅食なえだくなて来たべ。何故なえだじゆなぐ足ひとりであ自然にそつちさ向ぐけど。

ほして先ず土間で餅搗いどこでる様子ば、屋外おにやの木立の繁みさ隠つて覗びつきこんでだど。ほしたら餅さありづげだらと寄つて来た者な、野猿やまのあにばりでなえ、蛙さきだも先程から来て

て、打杵さ餅くつついでとつぱちけで（偶然）飛んで来ないがて、大口あげでながめったけど。

「何だお前、こげた所さ構えったて、餅一切れ口さ入るもんでなえ、どうだ、良え工面あつさげて片棒かつがなえが」て誘てな、ほの良え事という手順おへつけど。

先ず、蛙あ井戸端さ行つて、幼児の泣声まねで大声立てるこった。ほうしつと井戸の中さ幼児落ちだがと思て、家の人達餅搗き放つたらがして大騒ぎすつさげ、そのこめえ（瞬時）に猿あ餅ば盗んで山さ運んでおぐ。蛙としては足が鈍いさげ、ゆつくり上て来てよい。後で二人で、たらふく食えるていうなだけど。

なるほど、猿知恵は流石に^{さすが}に^が沓えでるじよんで、蛙も餅につらつで猿のいう通りすつこどしたど。ほして良え餅は七五三に搗ぐもんだていうさげ、ちようど搗き上る頃、猿の合図で、蛙あ「オギヤア」て、大声立でだじよん。

家の人達まんまど騙さつで、餅搗ば放つたらかして、やれ「灯火持て来い」「屋根綱持て来い」「梯子どうした」なて、家シ中大騒動。土間の方では、さつぱり

ひとつけ無ぐなたなで、猿の言た通り難なぐ盗み出すこと出来たけど。猿あ手際よく臼がらみ山の上さ担ぎ上げて来て、一服しつたどき、蛙あゆつくらど上て来たけど。

でも、猿あ待ちかねだように急いで言うには、

「餅は上首尾に手さ入たども、このまま食たても面白ぐも何ともなえ。どうだ、まと（更に）変たごとしてみなえが」てだど。

と言うな、この山の天辺がら臼ば転ばし下ろす。二人一緒に追かけて行て、臼の止た所で先^さぎに着いだ方ば勝にして、分前^{わけ}多ぐしんべて言うなでな。こういうずる賢いなば猿知恵て言うなだろな。

蛙にしてみれば、此処まで来んのもやつとさつとだつたさげ、これがらまだ走らんなえどなたら、こわくて面白ぐも何ともなえべ。このままで二人仲よく分げで食たらて言たど。でも猿あ承知^{きかな}得えで勝手に決めてしまてな。餅の冷めなえうち急ぐべどて、急き立てて臼ば転がしてしまたけど。

下り坂ば重い臼がゴロンゴロン転がんのださげ、だんだん馬力かがて来て、唸

り立で何処まで行っても止まらなくなる。猿あ嵐気なて後追たども、蛙あ足遅くて、ピョタンピョタンとはねでるうち、そんな後姿も見失てしまったけど。

ほんでもどうだ、坂の傍の笹原さ白い餅がもつこりど湯気立でくつついでんな発見だんねが。ほれこそ笹餅でこれなんだがど、蛙あ思わず御天道さまさ手合へで拝だごだご。猿の分は取ておがないたても、臼の方で独り良い目にあつてんべさげど思て、じゅんぷく（腹一杯）馳走なただ。

餅腹パンパンしてつとき、どうした猿まだしよげがえつて引返て来たけど。すつと下まで臼追て行たども中あ空ッぽで、餅などひとつもくつついで無いけ。

行く途中で皆な零れ落ちてしまたんだ。なじが俺ちやも少し分げで食せでくろ、今度から、ほつても意地の悪り事などしなえして、手摺つて詫っけど。

あんまり頼むなで可哀想なて来て、食い余た餅は笹の葉がらはだけで、猿の面めがけで打つからみづけて呉つたけど。

ところが、餅が猿の面さまつとらにピツタエンとくつ附いでしまたべ。たんだ猿あ、「熱ッ熱ッ」て、飛び上がてわんめぐ（騒ぐ）もんでは。ほれでも食い意地

張つてつさげ、面さ付いだ餅ばへっぺがしては、くちやくちや口動かす、その様^{さま}つたら可笑しいごど。

とに角、猿の面はこん時に熱い餅で火傷^{やけど}してから、あ^んげに真赤になったなだど。

どんぺからんこ なえけど。

他人の身は考えない、自分^わばり良え目にあおうとすると、猿みでえ罰^あ当て一文の得もとれなくなるもんだ。

6 弘法泉の由来

昔あつたけど。西郡じゅ所^{どころ}、あそこの先祖また庄内がら山越えで来て拓いた所で、大沢村でや一番古く開けた所だじゅごんだ。んださげ、昔あ庄内さ抜げる道もあたんた。

其処ば通つて来たもんだが、見がけたことのない旅の坊さまが、この部落むらさ入つて来たけど。見るも汚ほえどならしい、まるで乞食にされや劣た恰好して、ポロポロ風でもこぼれそうな様子なりしてだけど。長居されではこっちが迷惑するじゆなで、立寄らつた家では、どんどと握飯やきめし握てあづけて追てやる勘定したべ。

乞食だて人間だもんだもの、どうせ恵で呉れるものなら喜ばれるようにして授げだら良さそうなもんだ。んだども、その家では握飯ば朴の葉さも包まなえて、厩うまの前のあお草あおくささ混つた葛の葉はさ載せで呉つたどこだど。朴の葉なのなんぼだて採てあんべども、賤やしめでそれば使わなえがつたべちや。

何故なえじゅごんだがな。ふしぎどほれがらじゅもの、西郡の部落の中には、葛蔓消えて、生え繁らなくなたど。人ば賤めた罰が当たなだろ。ほの乞食坊さまじゅ者も、屹度ただ人じやながつたがもしんなえなや。

西郡で握飯貰た足で、こんだ小国さ出だんだな。そつから広い朴野ば通つて田郎さ出て、ままつと奥いりさ行てみんべど思て、其処そこ辺で道きいだべちや。丁度下の家の爺さま藁仕事しんべどて、藁打ちしつた時ときだつちや。法衣ころもの裾わかれでは若布みでえ

にボロボロどさせ、向う脛では擦傷だらけの蚯蚓腫れ、勿論履物もはがなえ素足は血滲まへでだど。なんぼが難儀して藪原やぶやちを巡て来たんだろ。この様子見て爺さま、いどしくなて、同情なさせくつだくなたけど。

道はしつかり判り易おぐ教へだどもな、「待で待で、履物作てやんべ。ちよつこら待でちや、草鞋ええんだが、足長だら直ぐ出来るども」て、爺さま今打った藁で履物作てやんべどしつけど。坊さまも切角の親切だおん、有難く頂戴することしたろ。爺さま土間さ蓆敷いで、藁仕事さかがたべし。傍で一休みしながらいろいろ話込んで、出来んな待ちつたべちや。

坊さま言うけど。「爺ちゃん、何が不自由してる事でもなえがな」てだど。

「俺みでな乞食坊主には何一つして上げられるものないども、身の上に良えこと授るよう拝でやるさげ」てだど。ほしたら爺さまったら、慾のない人で、今今んどこ大して不自由感ずることもなくて、まめで暮してつさげ何よりだてだど。

「んだれば、家の事でなくたて、他にこげた事あつと良えと思う事でもなえがな」て、念押すけど。

「そう言わつても、どうも一寸思い浮んで来ないな。でも坊さま此処来んのに何処から抜けて来たや」て聞いたど。どうも小国がら野さ出はて、巢子さ向かわなえでこつちさ曲つて来たものらしいでや。

「その野の事だども、此処は小国、谷地、砂子沢、巢子、田郎と五集落の人達の共同草刈場でな。こつち大川の方がら小国川筋さ抜げる近道でもあんなだ。んでも広々とした野で、近くに水氣のないのが困りもんでな。稼ぎ行て昼食しつたても呑み水さ遠いし、草刈ても鎌の砥水ないが不自由だじゆんだな。何処が休み場あつたら、なんぼが助かんだが」て、爺さま日頃部落の衆達こぼしてること
を思い出したどこだべ。

語てるうち早えもんで足長一足出来だどこだど。

「道の悪い所を歩ぐにや、足長は踏んばりきいで履き易いもんだ。緒ば丈夫に作たさげな」どて、坊さま履がへだれば、なんも嬉しがったが、何度も何度も手合せ頭下げして行んけど。

ほのごとあつて、幾日も経たながったべな。不思議な事に、朴野の部落割した

真中しごろさ湧水見つけたな、な。何でもない広場がら、コンコンと泉が湧出しつたじょん。これには場所おべでる人なら聞いただけでも驚くべ。何たて神業にちげえないどて、えらい評判たつてな。んだらばこの泉、粗末なのさんなえじゆなで、部落の頭だた人達が相談して、その泉の傍さ松の木ば植えるごとしたど。この樹大きくなたら日陰作って働く人達は勿論、此処ば通る人達にとつても良い休ン場になんべ、て喜んで語たけど。

ところで足長ば作て呉った爺さま、ふと思ひ浮だど。あん時の坊さまの仕業でながったがなど。特に坊さまに頼み事したなではながったども、何だが只の坊さんではなえよな気がしたつけど。爺さまのもらした話も噂立つにつれで、屹度ほれにちげえなえて言う向きも出て来たけど。とうど、それが弘法さまて言うごとなてな。ほれがら誰がつけたど言うごとなく、この泉ば「弘法泉」て呼ぶよになて、今もそう言つてんだでや。どんぺからんこ なえけど。

ほうしつと、西郡から葛ば消したなが弘法さまで、朴野さ泉湧して呉ったなも弘法さまだな。親切に世話でくつた所には良えこととしてお返し、世話の悪い所に

はそれだけの戒したお仁だんだな。

人は見かけだけで賤めるもんでなえ。誰さも親切してやるもんだな。

7 小又の怪力童子

昔あつたけど。小又さおつかなえ（大変な）力持ちの童こいな。昔、新庄さ領米運ぶな、普通の人は半俵にして背負て行たもんだども、この童こじゅあ十三やそごろで大人凌いで一俵の米を楽々と背負たどこだど。

或時、^{あつぎ}途中の野で雉がえつぺえ（沢山）遊んだな見つけで、夢中なて追つさらたど。他の人達は荷ば下してかがたつけども、この童だけは背中の米俵ば下しもないで雉追^ぽかけでだけじゅごんだ。

或時、^{たぎねむら}滝上部落の力自慢の男まだこの童こと力競べしんべていうなでな、小又さ上て行て、其処の家ば訪ねだどこだど。挨拶代りに、「お前さんの荷杖ば借りで

え」て申し入れたど。ほしたら「お易いご用だ」て言うなで、直ぐに自分普段使つてゐる杖ば出してよごしたけど。

大体、荷杖じゅあ桐の木など軽木の二又なつてゐる所で作るもんだ。坂道さ來つど杖につつぱり、草臥れつと道さ突立つたままでも、背負た荷を杖で受け支えて力抜いで休むなで、なるだけ輕こえ工面してたがぐもんだども、この童この荷杖は堅木で重ぐ出来でだけど。

滝上の若え者が杖ば借りて其処を出る時は、いかにも輕こく見せでさばいでたけども、一たん草臥こんで來つと杖つくどころが、重だくて重だくて何時のこめえにか、肩さのせでつけじゅこんだ。この力持ちの童この名前まだ六ノ函て言うたけど。

秋田で毎年祭には花角力かがたもんだど。其処の一番の名取力士て言えは「赤禪の三吉山」どて、まだ誰と角力とつても負けだごと無しだったど。祭りば見に行た六ノ函、まだ身の程も知らなえで、これさ勝負挑だどこだど。なんぼ力あたて、大人とまだ子供、本氣にならつたら潰されるばりだべども、がつて（苦に）

しない童だもんだ。

赤禪から先ず四股名ば名のれて言わっじょん。そう言わつても、こういう所さ
出て土俵踏むな初めてだったべさげて、別に四股名も持てなえし、考えでさえな
がつたべや。ふと思いついで、「大江山」て、口がら出まがせ言てしまたどござど。

さあ太平山ごととしてはそれ聞いて度胆抜がつでしまった。て言うなは、大江山
とあれば、自分よりずつと上格の山神である。これは何があんのじゃないべが、
何た粗相でもあつては大変と、心をかすめると、つい迷いが出てしまった。そこ
を破れかぶれの大江山に突かれて土俵を割るという始末。とつばづらかして（予
想狂つて）軍配は大江山に上つてしまった。

さあ見物人は大騒ぎ、今まで一度たりとも負け知らずだった赤禪に土がついだ
んだから拍手が湧くんだか、祝儀は飛ぶんだか、大変だったけど。六ノ函持囃さつ
てすっかり好い気持でいたべ。

土俵下りでがら勧めらつて一風呂浴びて汗流そうとしてつとき、さっきだの相
手太平山が顔出して、礼儀つぐすどこだけど。

「風呂加減はどげですべ、背中流しあんすか」どて、薄気味悪いくらえ下手に機嫌うかがうべちや。あげぐにや、六ノ函の入つてゐる風呂桶はそのまゝ抱き上げて、「風呂はこの向き良げすべ、こうした方眺めも良えし、も少しこつちさ寄た方良げすかな」とか、気を配つて大力無双振りを發揮して見せんなど、大江山ごとくしては、どでかつぺして小ぢやこくなて風呂桶さしがみついだどこだど。

やがて隙見で風呂がら上るや、這々の態で小又さ逃げ歸つて来たけど。夜道かけで一氣に走たなで、血の小便出たくらえだつたて言うことだ。角力にや勝つても、おつかなえ目にあつておんごとだつた。後で考えつと、どうも相手の太平山は秋田の霊山太平山の権化だつたんなえべが、て、六ノ函語つけど。

どんぺからんこ　なえけど。

あまり天狗なて、お調子さのらんなえもんだな。殊に知らなえ所じゅあ、氣つけないど。

8 山屋の贋金造り

昔あつたけど。何処どこから渡て来たもんだが、山屋の長兵衛という家さ、悪者達寄つて来て、贋金造り始めだけど。昼間にや酒呑んで寝がしやて、夜シまなつどコソコソど錢造つてゐる風だけど。

まわりの人達も悪事してつちゆごとは薄々感づいていだなだべども、それお上つげうちさ告口すつど、どげた仕返されつかもわがらなえんだしな。近所迷惑もええどごだつたふうだちゃや。んだどもな、なんぼか領主とみなさまのお耳さも聞げでだんねべが。

或時な、こつそり侍姿の人見えで、あつ事なえ事、何んでも聞き調べて歩くけつ。ほしてこの侍、まだ明日どうしても庄内さ越えで行がねばならなえ。大事な物は運ぶなで、街道ば避けて、人目つかなえよう山越えしたえさげ、間道さ詳しい者ば案内つけて欲しいて、庄屋ば呼んで申しつけたどごだど。途中で危険なことも起きつかしんねさげ、案内人にも氣つけで警護まもてもらわんなえ、少しは腕節もきく、度胸のすわた強者三、四人も居ないだらうか、ていうなだけど。

庄屋まだ早速ど、この話ば村の衆さ計たべ。日当もたんまり貰えるし、其の上、庄内さ無事着いだどころで、褒美もしこたまはずむていうなで良え話だども、途中なんた事起ぎつか気がかりで二の足踏む者ばりだけど。そさくつと、贖金造り達、この話ききづけで、何が考えあつたどみえで、逃がすもんでなえ。

庄内さ持て行く宝物じゅあ何だにしろ、俺達どこ連れて行くには路銀だて充分用意してゐるに異ない。さいわい街道ば通らなえで間道越すなだていう。若し途中でこの荷主をばらすとすれば願つたりだて言うなで、他人は交ないで贖金造達ばりで行くよう申出たと。たいして荷物どてないども、何がど役立つべど、丈夫な荷杖だけは用意して従て行つたけど。

さあ、これから人里を離れて山道さかかるていう時、侍まだ言うにや、「お前達は案内人だから先に立て歩げ」ちゅもんで、皆ば自分より前方立てて歩がせて、後から幾か間を置いて従て来るていう按配だべ。それさ一服しんべとなつと、今度は皆より一段と高台さ上つて休みとるし、わずかの隙も見せなえじよん。折あらば力合せで荷杖で叩きのめしてくれんべと図つて来たなだども、とうど、そ

の機会もなぐして、庄内さ着いでしまたけど。

ほして侍の言うにや、

「お前達だご苦労だった。大役を果してくつたんだから、上役さまがら、ご褒美がたんと出る。勿論日当もはずんでもらう。この書状持って一足先きにご門をくぐれ、俺はもう一所用足して直ぐ行くから」と。矢立を出して一筆したためてくつたけど。

悪者達ごととしては、大した働きはしないども、これでご褒美がもらえれば、大きい当は外たにしても、まあまあと思たろ。ほして侍から教へらつた通り、その書状たがてお役所の門ばくぐたべちや。

でもなえちゅごんだが、それつきり後は門の外さ姿見えながつたど。ほれというな、侍は領主さまがらの言付けで山屋まで調べに行たなだつたふうだちや。ほして、とつくに悪者達の企みば見抜いではな。書状さもとつくりと認めであつさげて、多分、贖金造達はそのまま牢屋さ入れらつたべちゅごんだ。

どんぺからんこ なえけど。

悪い奴等ださげ縛てくろて書いてあんなも氣つかない。字読めなえじゆは情ないもんだ。お前達、学校さ行て、んと字覚えなんねな。

9 河童与吉の頓智

昔あつたけど。平岡生れで名前は与吉、おつかなえ（大変）力持で、給金も二人前もらつて稼いでいた男だった。でもきづこえ（身勝手）で少しぶんで（臍曲）などこもあるもんださげ、河童与吉じゆ仇名つけらつてだけ。

河童与吉あ、西郡の三五郎家さ若勢に居だごであつた。三五郎て言えば、この近在にはちよつと並ぶ者ないて言わつた大百姓だべ。一体どの位米があるもんだが、与吉さ聞いたごころ、糲の糲俵で八百五十俵、粳ならなんぼあつか知んないてだど。先は西郡の三五郎家から野崎の御倉まで米俵ば並べでも、まだ余るて言わつたほどの大百姓だったふうだ。

与吉あ稼ぎも良えが食の方も良くて、この方もすぐれたもんださげ、或時、旦那まだ冷がして、「与吉働くなでなくて、わっぱ飯あ働くなだべ」て言たじょん。ほう言わつた日、なんたつもりで与吉まだ弁当さ手つけないであがて来たけど。家の人達あ、不審に思て、「なぜしたどこだ。体でも悪りどこんなえが」て、心配してきいだけど。

与吉あ言うにや、「鍬の柄さわっぱ繋いで稲株の傍さ吊して置いだども、わっぱ一株も耕せながつた」てだど。わっぱ飯働くなだて言つた旦那の言葉さの面あてに、言い返してやつたどこだべちや。

この河童の与吉、後で川通り（岩木部落）の久右エ門の家さ若勢移たけど。こさ来て、或時、稲掛杭を準備するよう言いづけらつたけど。旦那まだ囲炉裏の横座さ坐たまま与吉ば呼びつけでな、「稲掛杭の寸法は鉋を持た手ば伸し上げたくらの長さでちようど良えもんだ」て。手振りで指示したどこだど。

与吉がほれを聞き違えたのが、山で杭ば作て運で来たな見だけば、寸詰りの短えものばりで、とても稲杭になど使われそうもない。旦那が「あれほど口酸っぱ

く教へでやったのに、け・ち・け・たものこさえあがつて」でござえだどこだど。

んだても与吉は旦那に言わった通りの寸法にきちんと揃えでこさえだなださげ、叱る方が無理、まるで蛙の面さ水かけだて言うんだ。てんで動転しなえけど。つまり旦那まだ坐たまんまで尺を示したなださげ、その通りの寸法だて言うなだろ。旦那も与吉のむん・つ・くりんにはほどほど閉口したけど。

与吉という人は稼ぎは良えげんど、他人ひとにかれこれ指示されるな嫌いだ性分だったんだな。ほださげ短い駄目な杭を四十八本の外に、長いまともな杭を四十八本、ちゃんと別に仕立てて運で来てあつたと言うことだや。稻杭作りは一日仕事で言えば並みの人で二十四本ださげて、与吉あ二人前だべさげて四十八本用意さなんなえだおん。

まだ或時、この与吉がにおぶたは大きくかがわないどいげねて指示さつたここだど。ほしつと何がまだ腹の虫納まらねがつたべ。萱刈にやらつたところ、馬さ四束ついで、自分わあが二束背負つて帰つて来た。

「大きくかけて言わつたから六束刈つて来たども、こ・ち・け・たひびだれ（弱虫）馬

た・て・る・じ・ゆ・無・え・も・ん・だ。馬この背負えないどこば、俺が背負て来た」どて、力み立つとこだけど。大きくて言うなは、に・お・の・量のごとでなくて蓋の大きさば言たなで、与吉の方でそんなこと万々承知していながら、素知らぬ振りして逆らてみだとごだろ。

与吉あこんど、家中奉公にあがたごとあつど。お侍が相手だから今までの旦那達みでえにぶ・ん・て（勝手）こげんだか。余り逆らうど自分の首飛ばなえども限らねさげてな。勿論二人扶くれつさげ仕事は何でも二人前働げて言わつた。

でも一番辛えごとて言えは、一と朝間に金山と舟形どか北と南の方角の異つた土地さ、一・ど・こ・え・使・い・出・さ・れ・つ・こ・と・だ・つ・た・ふ・う・だ。それど籠担ぎだけど。相棒なしの独り担ぎ、それだて約束は約束だんださげ我慢したろ。

或時、与吉あ藩士しんさまば籠さのせで、独りで担へらつて出がけだじょん。三本橋の橋の上さ来た時のごと。藩士まだ籠の中から外をのぞこんで、「橋の下の淵には雑魚もたんと棲いるだろな」て、声かけたけど。

与吉、それ聞いて待つてましたとばりに、「ご覧なさいませ」て、藩士ばのせだ

ままの箆を欄干越しに高々と伸し上げて、瀏の真上さ差出したどこだど。

藩士でば川ン中さ突き落されんながと思て、胆冷して、とうど与吉さ手すったけど。ほれがらじゅもの、意地の悪い無理な命令はしなぐなたけじゅごんだ。

どんぺからんこ　なえけど。

なだみっつ

づき

人に使われる者が涙三粒こぼした時は使う者も十粒こぼせ―使われる身を思いやれて言たもんだ。

第四部

言葉にかかわる話

ずつとの昔、ふる里は庄内藩に属していた。

今でも、あたりの町や村と言葉づかいに、どこか異なつた匂いを感じられるとしても不思議ではなからう。

昔、蓑を常用してる頃、蓑をミノと呼んだのは郡内では此処だけ。近郷ではミンとか、ミヌとか、今は同じ町内だが、秋田に近い及位地区ではケラと言っていた。

県内広く眼を移しても、庄内がミノと呼んで、村山、置賜でも内陸地方は大方ミヌだった。

この地は近在から僻地とさげすまれながらも、往時酒田に近かつただけ、何やら京に近い面もあつたのかもしれない。

1 作 兵 衛 帖

昔あつたけど。昔、作兵衛どて背負こ商して歩いだ男いだけど。律儀な人さ
げて、んとはやて（とても繁昌）な、だんだんにお得意も増えだなで帖面つける
よになたじょん。

この人あぎねあつど。この帖面さつけんなで、帖面と矢立ははなさなえ人だつ
たど。んでもな、字ばろぐに書げも読めもしなえなで、自分わだけの覚あの符帖ば画
いでおぐなだけど。やりとりあんべ、そうすつと、やった方ぢやは槍の恰好画い
でおぎ、取った方ぢや、鳥こば印しておぐ。字ば知らなえさげ、絵図画いでだつ
たろ。

或時あつぎな、隣の家がら鶏の卵借り来たど。七つだか十だか、なんぼだか貸してや
たべぢやな。そうすつど、早速だは、何時もみでえ帖面さ隣の目印画いだなさ、
卵の数だけ丸こ並べて画いでおいだど。そこまではええな。それがらずつと経つ
て、貸した卵ば返し来たけがら、帖面開いで並べた卵さ横に棒引いで消したどこ

したど。これで借り貸しも無しでいい訳だんだ。

ところで、暮^{つめ}が来たなで帖面調べだれば、隣の分串柿の貸書いであんねが。まだこげたな残^もったけがど思^もて催促したれば、隣^{となり}家ではそんなもの借りだ覚えは無え。今年^{おらえ}は俺家^{おらえ}なの柿豊作^{ふだ}で豊作で、串柿なの売るくらえもこさえた。欲しがつたらこつちで卸しだえくらいだ。何がの間違えん^なえがやてだど。今まで借だものて言えば、一ぺん鶏の卵借りだごどある。それだてちゃんと現物で返した筈だぜ。何でも帖面さ書く人ださげね^ずく調べてみてくれろて言い返さつたけど。

そう言わつて、なるほど卵が串柿に化けだど氣ついで、作兵衛まだ大謝りしたけど。確か、卵返し来たさげて棒引いで返済したごとしたなだつた。ほれば串さしたものと思ひ違ひしたなで、何したても作兵衛一代の不覺、後々までの笑い草なただ。

この作兵衛の帖面で、こう言う面白^{おもへ}ごとともあたふうだ。或時、西郡さ商いに行たじよん。何時ものごと貸売^{かひ}りしたべ。西郡に半九郎どて大きな家あたなで、そこの家の目印に半九郎まだ半黒ださげて、丸^{まる}こ画いて半分黒く染めだじよん。ほし

たら、もう一軒、半四郎という家もあたなで、そっちば半分白く残して画いだべ
ちや。

さあ後になって、この半九郎と半四郎ど、どっちがどっちだったべか。丸画いだ
うち、どっち染め残しで、どっち画き残しだったけがな。半黒が半白が、どっち
ども判別つかなくなて、半九郎さ催促すつか、半四郎の方ええが、取立すんな困
てしまたけど。

こんでがらじゅもの、なんぼ帖面さつけでもや・じ・や・が・な・え・（仕様ない）じゅも
んだ。書ぐあ書ぐにしても後で用なさなえでは、も・ん・じ・や・な・え。こげだなば人は
「作兵衛帖」みでえだというて冷がすよなたど。

やっぱり、ちゃんと学校さ上て字習わなえど、絵図ばりでは用足んなえ。勉強
はしっかりしなんなえもんだな。どんぺからんこなえけど。

2 大沢節の由来

昔あつたけど。昔、河川^{かわ}が沢の流れだど五十は合さんなえがりや、そう呼ばれる資格ながつたもんだど。川て言てもおがしくもなえよな大きい宮田沢なの、支流がたつた一つ足んなえばりで格つかなくて、川ど書き上げらんなえて言わつたもんだ。んださげ何でも沢て名付くど、どこがやしめ（軽べつ）らつたよな気がしてな。

此処も今は町のうちだども、元は安楽城村て言たし、そのずっと昔にや、大沢郷て言たもんだつけ。ここを流れる川だて今は鮭川て呼んでつとも、昔は大沢川だつたべや。同じ流れだども何故してだか名前ちげたもんだ。

この大沢川が中ノ瀬^{しも}の下流、岩木で真室川と合させ、そこから鮭川と名前も変たもんだつけども、昔あそのへんば川口郷て呼んだ所^{ところ}だど。ほして川口衆^た達は川の奥^{いり}の大沢ばやしめで、斯う言たもんだつけ。ホラ唄あんべちや、大沢節な。

へ大沢三千石居だぐなえじやなえども

夜飯あ夜中で 度々困る

この唄の由来はな、大沢で言う所はこの川の奥だとも、行つてみると思いがけなえ広い所で三千石もあつて、別に住んで住み難い所でもないべどもさえ。

ただ女子衆のこぎ使われつ所でなや。中でも一番こわえ（辛い）仕事じゅあ根花掘でだど。山でわらびの根っこ掘起して背負つて来て、ほれば川で洗てだおん。山仕事さ、しかも水仕事重なつさげてこわえじゆんだ。

夜飯も夜中時分になることだて度々だんださげ、却々つとめの楽でなえ所でな。大沢さなの自分娘だつたら嫁になどやつ所でなえて。この唄はそう言うごどうだてんなだど。大沢衆がきいだらごしやぎそうなごと伝わてるもんだな。

昔あ、根花で言うど相場もたつて、一升枰で量て一円もするものは根花ばりだて言たもんだつけ。勿論一円で白米一斗も購えた時分の話だとも、山所でや根花掘りは一時宝掘りみでえだつたんださげてな。ほれの出来なえ所では少し妬ましがったがもしんなえぞ。俺の聞いっただなでは、本当し所、こげたことがこの唄の起りだつけぞ。

昔の人はよく零すもんだだけ。新庄さ行ぐて言うど、大沢を出はてがらばり五里近く峻しい山坂越して行がなんなえ。川越だてかれこれ五へんも渡てたど。今みでえ立派な橋も架てながったべさげ、浅瀬を伝て渉ることもあたるがら、難儀したもんだべ。

昔あ、領米を納めんのにや、半俵にして人の背中で運ぶよりしようながったど。

新しい草鞋ば三足もたがて行たもんだつけや。西山の峠さ来つど、お城も見で来る。そこでやつとやれやれて言う気にもなたべちや。一服してゐるうちに、鼻歌の一つ二つ出はて来たもんだがもしんなえな。

暗々に家を出て来たても、此処来つど昼ま過ぎてしまふでやは。これがら峠ば下りで町さ行て、用事がすらすら運だどしても、家さ帰り着くな夜中なてしまふんだ。しょんねえ（仕方無い）な。ふと胸さ浮んで来たことがそつくと歌になたもんだろ。溜息だて歌にもなれば、それでまだ力も出たがもしんなえ。考えてみつど、へ大沢三千石ア どっちしたてへつない歌だったんだな。どんぺからんこ なえけど。

3 大 沢 言 葉

昔あつたけど。これも川口あたりで伝わった話だとも。

大沢じゅ所^{どこ}は、言葉使いの悪い所でな。他所がら来てみつど、土地さ住んで人^ひ達^{たち}同志でしゃべてるごと、何言つてつが、さつぱりわがらなえずごんだ。

海辺の酒田や、ほれに秋田の矢島あたりも、長嶺越に抜ける間道がなんぼもあつさげ、遠いようでもほんげでなえ。なんぼが往来^{ゆきき}もあつたべさげて。何時のこめえにが、ほっちの言葉も混り込んだにちげえなえ。ほれで最上でも周囲^{まわり}の町村どはちとばり違てんだな。

時たま見廻りにやつて来る代官さま達も、大沢の言葉使いは何とかさなんなえど思^もていだふうだちやや。それにゃ先ず、京の都から言葉なおしの先生ばよばて、この大沢さよごすごとなたけど。

都がらて言えば、遙々と海越してござらしやるなだ。ほの先生じゅあ、きつと偉いおつかなえ人だんだ。叱らんなえように氣をつけんべて、人の先さ立つ庄屋

さまや組頭^たどん達も氣持ひぎしめでかがること語り合たごだど。

はて、それじゃ今まで使てた在郷言葉で一番悪りじゆな何た言葉だもんだかとなたべ。でもな、病^{やんめ}みでえなもんで、自分^わでや自分^わどごよぐわがんなえふうだちや。とにかく、えやづげ（敬語）ばえっぺえ使てしやべればええなだべどなたど。と言てもちよっころそうんまぐ行くもんだが。

ほの内、言葉直しのお役人さまが村さ着ぎなさったど。長年使いなれで来た言葉て言うものあ教へらつて一日や二日で直ぐなおるもんでなえて言うなで、長く逗留なさて氣長にかがて下さることなたけど。

これには村の人達もなんぼが氣詰^{きづめ}で、息が詰てしまふべて心配^{あじこ}したども、直す所はきちんとやらったども、格別に在郷言葉とび出さねば、ほんげにやごしやが^んねけど。

ほげこげ（そうこう）してる内、すっかり村の衆ども氣心おげなえ間になてな、一寸見たどこどつちがどつちだがわからなえくらえなたけど。ほしてや、言葉直しの先生さも、在郷言葉も少し移たふうだでや。漬物^{いれもの}みでえに同じ容器^えさ入つて

おぐと味が移てしまうがな。長え間にやきつとそうなるもんだべぢやな。

今なても不思議なごとにや、大沢の人達の話す言葉さ時々上品な京言葉の出てくつことあんぞ。それて言うなは、きつとこの言葉直しどから移たなだかしんねへば（そうすれば）氣つけでみろ。大沢衆まだ同じ最上でも他所^{ほか}どこかちがうさげてな、てだど。どんぺからんこ なえけど。

4 長 頭 廻 し

昔あつたけど。昔、或ッ時、滝上^{たきね}の親方さ、お代官さま来てお泊りになた時^{つき}のごどだど。

寝しなに庄屋さまどこお呼びなて、「明日は早立すつからちようづを早ぐまへよ」て、言付なさつただよ。庄屋^ごとしては、ろぐすつぽわがりもしなえくせして、

「ハイ、かしこまりました」どて引き下て来たどござど。

さで、ほのち・よ・う・づだ。聞きただすも辱しど思たが、何だかも判らなえまま引ぎ下たど。どう考えでも思いうがばなえ。誰がおべつたがしど、まず筆取どこ呼んで相談かけたどござど。

「今、代官さまがら明朝早立すつから、早くち・よ・う・づをまへて言わつだども、ほのち・よ・う・づて一体何だべ」ていうことなたけど。

筆取も相談かげらつたども、これも首ひねるばりで良え知恵浮ばなえ。いろいろ手のひらさ指先で字なの書いでみだりもしたべ。チョウビツをあれこれ組合せでみんども、ながなが肯けなえ。ああでもない、こうでもないて言うなで、二人してねり上げで、「長頭」でなえがとなつたど。

お代官さま何のご用か知らないが、一番と頭の長んげ者を選んで差し向げろて言うお召にちがいあるまいて言うごどになたべ。

ほごで村一番の長頭て言うど誰たどあげでみつど、下の家の三平にちげえなえ。褒美をえつぺえ呉れつごとして、その三平どこ頼むごとしたど。

翌朝早々ど、中削ちよん曲^{なかすり}結^まわせ、羽織袴着させた上、扇ば持たせて一装用で

仕立てたべ。その上玄関の土間に筵敷いで、そこさちゃんと侍らへったじよん。

「お代官さまが、まへと仰つたらお前がくびとを廻すんだぞ」と、ねつつぐ言いふぐめだなで、これで何あ何たて充分ていうどこだろ。

ほのうち、お代官さまお目ざめなて、玄関の戸を開けるや、おつつくばてる（伏座）三平どこ見つけで、「ちようづましたか」て、きがったけど。

三平、まだ言いづけらつた通り、急いで首^{くび}ば三ど、ぐるぐると廻したべ。お代官さまがこれを見て、まだださげ首を横に振るとばり思たもんだろや。「早ぐませ」て催促なさつけど。

ほうすつど、三平まだ一そう勢つけで首ば廻すじよん。お代官さまのごとして、なんぼたつてもがんづかなえ、あれほど念を押したのに何事だとばかりに、「早ぐ早ぐ」と、いぎり立つてくる。

三平の方でも汗かきかき、眼まわすくらいに、庄屋さまの命令さ従たどこだべ。んだもんださげて、一向に話つかない風だなで、お代官さまが庄屋どこ呼びつけ

で、このいきさつを詳しくいだどこだど。

ほしたれば、他に悪気もなえ事と判て、何だ、ほげた事だったながて言うなで、代官さまのお腹立もおさまて、カッカと高笑いされだと言うごんだでや。

ちようづは長頭ではながった。手洗水で、洗面の鉢うわを配て、玄関の方さまわし
ておぐようにて言うなだっただど。

三平まだご前ば下てがら、大汗拭ぎ拭ぎ、「庄屋さま、俺あ眼まわて命さかかる
どこだった」て、言うけつけや。庄屋も冷汗たらたらで、「三平や、俺だて役目に
かかることだったぜ」てだど。二人はやつとのことではつとしあつただど。

言葉はええ振りこがして、判た振りばするもんでない。判らねば判らなえで、
聞き直したて相手に失礼でなえし、まだ辱ごんしい事でもなえぞな。

どんぺからんこ なえけど。

5 なりもの禁止令

昔あつたけど。差首鍋で言つても、まだ戸沢藩にならなえ庄内領に属してた古い時分のことだべな。松千郎どて言う親分株の人いだったふうだ。

或時、代官さまがらお使いがあつて、領主さまの家さ、ご不幸あつたさげ、領内ではなりもの一切断つて慎むようにて、厳しいお達しば受けだけど。

松千郎もこれがらなじしつか、土地の顔役達ば集めていろいろ相談かげだどこだど。決して落度などあつてはなんねえて、繰々も言わつたなださげてな、間違起さなえようにて伝えただけど。

でも、ほのなりものじゅあ何だべとなたれば、誰もはつきり判た者いなえ。俺達こういう時、生臭物ば絶つように、成物でも精進さなんなえのがどて、おべだふり（知つたふり）こぐ者も出て来たけど。皆なほれさつりごまつたべちや。こごらで成物で言え、先ず自生桃とが、谷地梨とか、山葡萄、ほれさ小梅なども入んべし、実の成るもんだら何だてだべとなたど。

へば、桃栗三年柿八年の柿もだろ。「柿の木五本、五万石」て言うなで、領主さまがら勧めらつて植えて何年なるやは。そればもう打た伐んながは、ていう者も出はたけつて。

一方、ほんだごど大声立でつと、自分の首が危なえんだぞで、たもど引っぱる者もいだけど。とにかく、言いつけらつた通りに成物はみな絶つて間違えないべて言うなで、村中にはえつた成木ば、みななんでも伐り倒すごとしたけど。

中には随分と家の足しになつてゐる樹もあつて、いだましがつたろども、やらねば後の祟りおつかなえさげて、泣ぐ泣ぐ皆な打つた伐つてしまたろ。伐り上げだごで、皆な集て成木供養だて言て一口湿したごだど。

酒がまで来つど、氣持も大きくなてくる。声も大きくなんべし、やがでにや歌も出んべした。だんだん賑がなて、とうど大振舞みでえなたど。

運の悪り時じゅあ悪りもんだ。そごさ代官さま領地見廻りに来て、ひよつこら顔出さつたけど。

「鳴物を断つて慎しめて、あれほどきつぐ言つて寄ごしたなに、村中あげてのこ

の騒ぎとはただで済すわけには参らなえ」どて、こつぴどぐごしやがったどこだど。

んでも、親方初め村の衆達ごととしては、代官さまがらのお達し通りのごとしてだつもりだったべさげ、お小言もらたんでは大当外れじゆんだ。どてかっぺ（動転）して、ほんとは何でごしやがれつか訳判らなえまま、なづきば土さ押っつけ押っつけして詫っけど。多分狐にでもたまさったみでえだったんだな。

人の話じゆあ聞き違えしなえよに氣をつけでな。えつくさどらんねば、聞きただしても不調法でなえ。一ぺん間違たら、このなりものみでえにおっかなえごとなる。氣つけないどな。どんぺからんこなえけど。

6 言葉の表と裏

昔あったけど。昔は川の中の庄屋で言えばこの近在の庄屋頭を勤めさへらった大物庄屋だったふうだちゃや。

或時、お代官が廻^まて来て、ここの家さ宿とたけど。ほして庄屋どこ呼ばて言うにや、「民百姓は飢饉^{けがち}の時は雑炊どやら食うそうだが、一どその雑炊を食べてみだいのものだ。今日、それを馳走してもらえまいか」と、所望さったけど。

庄屋は、「何のそれしき、ぞうさのないご用」ど承知して引き下たものの、よく考えてみると、なんぼお代官の言葉だにしても、その通り解釈していいものかどうか、頭が痛くなたけど。

民百姓ど同じものと仰有つても、干葉や蕁餅^えなど入^いつた奢らなえ本当の百姓達の糧^{かて}を進^{すす}めて不調法でなえがどうか。本物じゃ食べづけなえ人では喉も通るまいじゆ。

雑炊は雑炊でも美味^{んま}え食味^{あじ}にこさえてお勧めした方がえなんなえが。んまぐな

くてししやまし（持て余す）されるよか、舌鼓でも打てもらた方が、こっちもお褒めにあずかつかもしんなえ。何しても上役の喜びをかった方が得だろ。とにかく、言葉にも裏と表もあるもんだて言うさげな。

庄屋は、先ず精米から吟味して白搗飯しろつきまめを炊かせ、それさ春鱒はるますば掴めらせで入っだ雑炊ださげ、こげた佳い味えあたもんでなえ。なんぼお代官の身分でも、ほう口さ入るもんでもあんめえよ。

んだて、お城の周辺にや鱒ますののぼる川なえさげて、獲りだて料理するじゆ訳にも行がなえべ。てつきり「結構々々」どて、コロコロと喜もこばれるもんだと思て、「えっぺありあんすさげ、おだちけがちさっせ」て勧めたけど。

ほしたらどうだ。「百姓は飢饉けがちでも、こうした結構なものば食べでんが、庄屋ツ」とばり立腹なさんなで、庄屋まだちちやこぐなてへつつくばた（平伏）けど。

ほれがら、この庄屋まだ庄屋達の席の一番下さ下げらつてしまたけど。
どんぺからんこ なえけど。

7 えやづげえ

昔あつたけど。昔からの古い大家では正月が来つど、なつても新庄の町さ家中
礼じゅもの行たもんだ。

昔かわりから関係のあた侍の家さの正月礼じゅんだ。何時ものごとで、親方の旦那爺
さまも小知恵のきぐ若勢ば連れで、あちこちさ配るこ餅もちば背負せて出がげだふう
だでや。

先ず行きづけの家さ若勢おいで、そつから他所ほかかげることしたど。ほしたらほ
ごのご主人さま、徒然しつたんだな。奥がら出はて来て、若勢どこ相手にいろい
ろ話かげだけど。

「兄や兄、今年あ作まだどうだったや」て聞くじょん。若勢ごととしては、人前さ
出たら、繰々繰々もいやづけえ（敬語）使え、ど教おへらつて来たもんだし、何でもか
んでも言葉使い立派にせねばて言うなで、「だいで、しょうずの作あ良よげした」て
答えたどこだど。

「ほりや良^えがったな。ほれでは米穀の方はどうだったや」てきがったじよん。大豆^{まめ}、小豆^{あずき}て言えばいいものを、小生意気に「だいず」「しょうず」なんてぬがすもんださげ、そこのご主人もわんざど「米の出来」てば言わなえで、難しく米穀なて言たなだろ。

若勢^{わかし}ごとしては、ほのベイコクがよつくどわがなくて、何た文字を書ぐんだがど、首^{くび}ばひねたどごだんだ。相手もそれど察^{さつ}して、一そうからがてみだぐなて、「兄^{あに}、ベイコク」だよ、て、はだる^{はだる}けど。

ほしたら突嗟^{とつさ}には「なんですな、村の人達の評判^{へいぱん}ですと、医者^{いしゃ}の嬬^{はな}さまな、一番^{いちばん}だべじゅごどです」て、答^{こた}えだどこだど。

言葉^{ことば}使いじゅあ、あんまり良^よえ振りこぐもんでなえ。使^{つか}いづけない言葉^{ことば}は無理^{むり}に吐^はぐど、とんでもなえ失敗^{しっぱい}やらがすもんだ。気^きつけねばな。

どんぺからんこ なえけど。

8 へんとこ話

昔あつたけど。或^あッ所^{どこ}で爺と婆二人暮しの家あたけど。

爺あ朝間起ぎで土間^{にわ}掃いでだら、豆粒落ちつたな見つけて拾たけど。ほの半
ば種にすつこととしてとておぎ、残りば何が美味^{んめえ}ごどしんべどなたど。二人相談し
て、豆の粉こさえだらていうなで、そげすることしたべや。

炒^いり鍋さ豆ば入つて、爺あ薪さつくベツと、豆あパリンパリンではぢける。ほ
ごを婆あまだカランコロン、カランコロンと搔して炒る。黒ぐ焼ッこがすど苦ぐ
なっさげて、上手に炒れだどこで、石臼でゴロゴロゴロンと挽いだけど。

そればこんど漉すばんなたど。ところが、爺達コロシ持だなえじょん。さア困つ
たは。これはどからが借りで来なえばなんなえ。

「お前、隣の家さ一走り行て来いちゃ。俺は他の仕事さかがらなえで待ちでっさ
げて、さっさど行て来いよ」て、婆さまどこ急がへで使てやたけど。

「爺さ、何て言たけ、ああそうが、コロシだけな」

自分家にはないもんだし、普段余り言いづけなえなで、コロシば忘れそうなつけど。忘んねよにど、行く道々、心の中で「コロシ、コロシ、コロシ」と唱え続けで行たど。

これなら大丈夫と思てつど、堰あたじょん。それは跳ね越すどて、力んだはずみで、独りで「ヘントコ」て掛声出たけど。ほしたらそつから、コロシ消えでヘントコに変てしまたふうだでや。この方がずつと調子良くて言い易がつたんだな。隣さ行き着いで戸を開けるなり、「ハエットー、ヘントコ貸してくっちゃ」て言て入て行たけど。

隣家の爺さま、それきいで動転しては、「なえちゅごつたる、ヘントコ借して呉ろなて、一体そのヘントコて何すんなだや」て聞くけど。ほしたば、豆の粉漉すなだて言うけど。

「ほれならコロシでなえが、俺家にはあたにはあたども、合憎どぼこつて使わんなくなたおな」て言うけど。婆さまほれでも良えさげどて、がってしそうなえけど。

あんまりしつこえなで、「豆の粉漉すなら、もっこふんどし（越中禪）良えもんだ」て、擲掬たけど。ほうしつと婆さま、ほれ本氣して家さ帰て来んなり、「コロシなえさげ、越中禪で漉すどええて言わつて来た」て、爺さまさ語てきかへだけど。

爺さまも、「んだ勘定だ、きつと按配良えがしんなえな」て言うなで、自分の禪はずして、片方ば婆さまさたががへ、もう片方ば自分たがて、其処さ石臼で挽いだ粉ばのせで、パツパツと漉したけど。

誰も見でなえど思てたどごが、近所の童たち、爺ど婆で面白^{おもへ}ごとしたどて、寄て来たじよん。爺さまがそさ氣づいで体ばよじつと、堪えった屁ば我慢出来なえで一発ブーともらしてしまたけど。そのあほりで切角の豆粉、まわりさ飛んでしまたけべ。

へ爺あ屁の実あ んめえんめえ

婆^は婆^は屁の実あ んめぐなえ

そこらさまぶった豆の粉ば、童たちやらて（競て）きれいなめんなだけど。

どんぺからんこ なえけど。

9 嘘つきくらえ〜

昔あつたけど。或時な、大ほら吹きの名取達だ二人顔合せだけど。二人とも法螺吹きにかけては負けず劣らずで、吹きくらえこ（競争）なたけど。

話じゅあ自分家の裕福なごどば自慢しんなで、はでさは両方とも吹つさらうもんで、こうずうずう（図々しく）面つらして語られつと、ついのはんとにしてしまうもんでな。話もだんだん大きくなて、終にはこげた事なたけど。

片ッ方の言うにや、俺家にや月見の楼がある。明月眺めながら酒盛りするなも風流て言うもんだてだど。こころでや庄屋さまや親方衆の屋根でだて、月見の宴なて洒落ごめまえ、どて威張てみへっけど。

ほうしつともう一人まだ、俺家にや馬千頭飼たでつたてだど。千頭て言えば近在の

馬喰達皆集めだて探せる数でなえべ。誰も本氣して聞く者もなえべに、それ本當だと言ひ張つてきかなえなだけど。

両方とも負けずにひのど（我意）つツ張つたあげくにや、それでは来て確かめみだら良がろ、ほんなら行てみんべどなただけど。

ほして何日がして、今日は十五日の明月、なんぼが美しいお月さま見られんべ、ゆつくりご馳走なて来るつもりで月見楼のあるて言う屋敷さ出かけたど。都合よく途中ではの男ど会つて心良ぐ案内してもらたど。

さぞ立派なお屋敷だろど思て来たどご、先ず通さつた所てば、野中さ建つた一軒家の大ボロ屋、土足で上りごんでも不調法でなえよな所だけど。まさかこげた所んなえべ。小宿をとつたどこだんだと思たろ。さアそろそろ御輿あげて、本宅さ連れであて呉ろて、はだたれば、ま少しだ。お月さまそんま顔出すさげて言うじよん。

そう言つてるうち、草屋根の朽ち落ちた大穴がら、お月さまあがあがど射し込んで来たどこだど。案内した男まだほれ指差して「ホラ見ろ、居ながら横えなて

でも月見出けんべてだど。

呆れ果てたもんだ。雨漏れと米びつの底の見えるな化物よりおっかなえて言うけつて、雨降つて来たら一体なじしつとこだ。何が月見楼だどこ。月見御殿どころか、これではまるで狸御殿で言てもいいくらい。それでも二人は狐か狸にだまされたつもりで、濁酒のもつきりで月見の宴を張ったけど。

んだらば今度は俺家さあえで呉ろ。何もなえたて口濡らすぐらえは、て言うなで其処から馬の居る家さ案内さったけど。月見ごととしては、俺に嘘こがつて何た工面して仕返してくつかど、心ン中で楽しみながら後さくついで行たべ。

部落中から集めてきたたて高々数の知れたもの、ほればなじして千頭にすつか、ほの頓智見ものだと思てな。ほこの家さ着いでみだれば、自分家と同じボロ屋で厩舎など一棟も建て無え、土間の隅こさ内厩一つ、そこさたつた一頭の馬こ居るだけ。

人好えもんで、「他の馬は何処が放しつたなが」て、きいでみだど。ほしたば、「よつく厩ン中ば見でくつたけが」つけど。

眼ば馬の眼玉みでえに大きく見張たても、骨と皮ばりのやへ馬一頭眼に入るばかりだけど。背中では弓なりに撓しなて、さんど骨など出っぱりばなし、こげたやせひつからびた馬ばへんどて言うんだ。へんど、そうが、これア千頭ではなくて、やせ馬の方だったなが。

「んめえごとやらった」て、うなたつけや。考えつと、どうしてか自分から可笑しくなて来て、笑い止らなくなる。二人あ大笑いして、それからとはとっても仲の良い友だちになたけど。どんぺからんこなえけど。

10 餅の小話

昔あつたけど。或所の家で、嫁こが里さ用出来て行くなで、お土産持だへでやんべて、にわがえ餅搗ういだどこだけど。

ほして、今立たへだばりだて言うどさ、何処で聞ぎづけで来たが、餅ときたら

眼の無え知り合の親仁に顔出したけど。好ぎどて嗅ぎつけんなも早えもんだ。たいた用でもないのさかんつけ（かこつけ）て、上れども言わなえのさ、さっさど囲炉裏端さ上りこんで来たけど。

ほしてな、何とかかんとか話もちこんで、餅の出てくんのを待ちてる風がありありど見えつけど。でも、あんまり面の皮厚ぐされっちゅど、こやらしぐなえもんで、餅出して食へる氣もしなぐなたつたべ。

お客の方では、この家の人達たらなんたら氣がきかなえもんだ。俺の餅好きだらば知らなえ筈あんめえに、なんたらさどり悪りつたら、ほに。もぞもぞしながら謎かける風だでや。今日は何の日だけか、土間にわさ臼出はったななしてだの、厩の前の濡れ藁どうしたなどかて、いろいろさぐんなだけど。

お茶出ししった婆さままだ横座さ坐った家の爺さまどこのぞこんで耳こすり（耳うち）すつけど。「お客さまも用向済んだよださげて、餅の一皿も出したら良がろが」て聞く。

ほれば口に出して言うには、「ししょうづべえ、山と山とを重ね申すべが」てだ。

ほれは何た意味だと思ふ。ええが、先ず、「しようづべえ」だ。小豆と書いてアヅキだとも、大豆と書いてダイヅださげショウヅと読むことにする。餅まだペイだ。んださげ小豆餅と書いてショウヅペイになんべちや。ほして「山と山とを重ね」となつと、ほら重ねでみる、書いてみつど判り易い。出だべ。出なら出しますか、出しますまいかとなんだろ。「小豆餅あづきもちでも出して来あんすか、どうしあんす」て、きぐどこだべちや。

ほしたら爺さまが何と答えだと思ふや。「サゾに口なし、月に棒」て言たど。そう言わつて婆さまは首肯いで腰おちつげで、囲炉裏端から立つどもしなえけど。

爺さまの言た意味はな、サゾて言う字は口扁へんさ無と言う字を書くべ。ほして嘸から口とれば「無」だ。こんだ月に棒させば用事の「用」と言う字になる。これもホラ書いてつどぞうさなぐ判る。二つ併せで「無用」ださげ、「餅なの出すことなえ」ていう訳だろ。

爺と婆えシばのやりとりば小耳こみみさ入ったお客もさどたんだな。あきらめて、そんな尻あげて帰て行たけど。ほんでもよつぽど、の・ご・り・え（心残り）がったとみえ

で、戸の口出っ時、「ゲンタシヨウ、ゲンタシヨウ」て、吐き出すようにして行んけど。

ほら、畜て言う字ば上下離せば、玄という字と田という字になんべ。ほれさ生ださげて、「ゲン、タ、シヨウ」。つまりは畜生だ。うまえごと断らったなで、そつちも判じ物みでえな悪態をついで気晴したとごだろ。

どっちも字の見える人達だったんだな。どんぺからんこ なえけど。

あとがき

『安楽城の伝承』（二）を作ったのは、「山形の民話」にお願いして寄せていただいたものをまとめたものであった。わらべうた、早物語、ことわざ、昔話ありで、口承文芸資料として極めて重要なものであり、散佚を心配して一冊にまとめさせていただいたものであった。

その後、思い出すままに書いて下さるのをお待ちしたところ、みごとな昔話をいただいたので、「山形の民話」に掲載の予定ではあるが、同時に一冊にまとめ、『安楽城の伝承』（二）として、研究家その他に早速利用していただくことを希望してまとめたものである。

どうぞ話者の意を汲んで利用いただければさいわいである。

もちろん、話者の佐藤陸三翁の次の作品もいただければ、同様の形で資料としていと考えている。資料としての重要度は昔話に限らず、安楽城の民俗についても十分ご存知の翁なので、追々に民俗についても、ぜひおききたく、ご健康と

ご健筆を祈る次第である。

昭和六十年四月二十日

武田 正

安楽城の伝承(二)

— 佐藤陸三さんの語り —

昭和六十年四月二十日 発行

著者 佐藤 陸 三

編集・印刷・製本

武田 正

山形民話の会

南陽市三間通二三二—三
武田 正 方

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年六月三十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四